日文研

2021年9月　no.66

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

日文研　六十六

二〇二一年九月

国際日本文化研究センター

長崎奉行葬列図（ティツィング『日本風俗図説』パリ、1819年）

本図版は、天明4年5月10日（1784年6月27日）に死去した長崎奉行・土屋守道の葬列を描いた絵巻の一部である。イザーク・ティツィング著『日本風俗図説』に全図が分割した形で掲載されている。同書はフランス語で書かれ、1819年にパリで刊行された。ティツィングは1779年から1784年のあいだにオランダ商館長として3回にわたって長崎へ派遣された。日本文化を深く研究した知識人として知られている。葬儀が行われたのはティツィングが長崎に到着する約2か月前であるので、日本人から原図を譲り受けたと推測される。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス教授）

日文研

——エッセイ——

堀内アニック　「国際日本学」のゆくえ——海外からの視点　2

張　龍妹　平安時代の女性はどうして漢詩を詠まなくなったのか　9

ゴウランガ・チャラン・プラダン　なぜ「作者」を死なせるのか？　16

磯前順一　書評　大下英治『ショーケン　天才と狂気』　22

（以降は横組み、左綴じ）

共同研究　（1）

基礎領域研究　（17）

彙報　（19）

所員活動一覧　（26）

エッセイ

「国際日本学」のゆくえ――海外からの視点

堀内　アニック

すでに過去のお付き合いを通して知っていたことではあるが、国際日本文化研究センター（日文研）に半年ほど滞在して、いかにもその名前にふさわしく国際性豊かな場所だとつくづく感じている。長年の蓄積による成果だろう。「国際」ということばを真剣に考え、あらゆる角度から「日本研究」の活性化を目指しているようだ。その意味で、他の日本の研究機関に対しても模範的役割を果たしているのではないか。

その名前にある「国際」ということばは「センター」にかかると考えるのが自然だろう。実際、英語名のInternational Research Center for Japanese Studiesはそれを裏付けている。もっとも、英語名では「日本文化」が「日本学」（Japanese Studies）となっている点が注意を引く。英語のタイトルを日本語に戻すと「国際日本学研究センター」となるので、もとの名前と少し違ってくる。

さて、なぜこのような、一見意味がないようなことを話題にするかというと、数年前から、「国際日本学」ということばを頻繁に耳にするようになったからである。私の狭い知見におい

て、それは日本の研究機関の国際交流に関連して使われることばだと思っていた。それが、グーグルで検索したら、今では「国際日本学部」を設けている大学が四つもあることに気がつく。このように、「国際日本学」が研究、大学教育に浸透すると、国際日本文化研究センターも「国際日本学」の「メッカ」のように見られるようになるのではないかと想像してしまう。さらに「国際日本研究」で検索してみると、日文研が代表幹事機関を務める「国際日本研究」コンソーシアム（https://cgis.jp/）という組織が存在するのに気がついた。これは二〇一七年九月に発足し、日文研が日本各地で花開いた「国際日本学」や「国際日本研究」を掲げる機関に対して、指導的役割を発揮しようという試みらしい。私が素朴に考えていたことが、もうとっくに実現していたわけだ。

では、いったい「国際日本学」（または「国際日本研究」）とは何を指すのだろうか。この現象の元を探ると、実は、数年前どころか、数十年前にまで遡ることになる。私は「国際日本学」がどのような事情で、これほどまでに発展したのかわからないし、ここでは、問題にしようとは思わない。それよりも、この現象が海外の日本研究者の日常をどのように変え、研究者の間でどのように受け止められているのかを素朴に辿ってみたい。といっても、これは主観的な見方で、私の限られた体験に基づいていることをお断りしておく。

読者の中には、これが単純に世界各国（フランスを含めて）で進行中の知識の「国際化」、「グローバル化」の現れで、特に日本に限ったことではないと思われる方もいるだろう。それは確かにそうで、所属のパリ大学[1]も、いつの頃からか、国際化を優先するようになり、様々な政策

を打ち出してきた。それは、主に国際交流という形をとり、海外から研究者を招聘する共同研究や、修士課程や博士課程の学生の留学や海外からの受け入れが活発になった。最近では、英語のみによる修士課程の開設も促進している。また、フランスの場合、ＥＵに研究費の助成を申請するには、英語で研究プロジェクトを説明しなければならない。そして、そのプロジェクトの価値を認めてもらうには、自然と、英語で論文を書いたり、国際会議で発表したりすることになる。これは、ヨーロッパ各国が置かれている現状で、そのために人文社会系の分野でも、母国語で書かれる論文が減少している。このような事情と比較すると「国際日本学」という「武器」を利用して国際化を推進している日本には、いくらか独自の特徴があるのではないかと感じる。

「国際日本学」ということばを耳にしたのは、二十年近く前、文部科学省の助成を得て設立されたばかりの法政大学の「国際日本学研究所」から、私が所属する「東アジア文明研究センター」（Centre de recherches sur les Civilisations de l'Asie orientale）に共同研究の誘いがきた時が初めではないかと思う。模索期間を経て、最終的に確定した交流の形態は以下のようなものだった。すなわち、毎年、当時キンツハイムという田舎町にあった「アルザス日本学欧州研究所」（CEEJA：セジャ）という宿泊施設兼会議場で、双方の関心にかなうテーマで、国際シンポジウムを開くことである。日本からは上記「国際日本学研究所」のメンバーが主に参加し、ヨーロッパからは、テーマごとに新しい参加者を募った。アルザス産の白ワインを飲み、三日間寝食を共にすることは、参加者を近づけるには効果的で、この企画は好評を博した。海外に基盤をおく研究者にとっては、最新の情報を得たり、日本人の研究方法に身近に触れるチャンスが

与えられ、色々な意味で刺激的だったといえる。博士課程の院生も必ず一人か二人交えていたので、学生たちにとっても、大いに勉強になったのではないか。

フランス側の主催者の希望もあって、この一連の国際シンポジウムの利用言語には制限はなく、主に英語、フランス語と日本語で発表が行われた。日本からの研究者は、稀な例を除いて日本語で発表し、ヨーロッパ在住の研究者は日本人であれば日本語で発表したが、たいていは英語で発表した。シンポジウムの成果として出版物が毎回企画されたとはいえ、その出版物が大きな反響を得たことはない。それは言語のギャップによるところも大きいが、共同研究に対する姿勢とも関係しているように思える。毎回、テーマが変わるたびに、参加者も入れ替わり、一度きりの出会いで大きな研究成果を期待することはかなわなかったからだ。そして、「日本学」という枠では、あまり専門的な話もできなかった。結局この企画は、海外に日本研究を発信することと、日本の研究者に海外で発表する機会を与えることが主な成果になったといえる。

このような、微妙な問題点をはらみながらも、この種の形態の国際シンポジウムやワークショップは、その後、目覚ましい発展を遂げる。日本各地の大学機関から研究者が訪れ、ヨーロッパで国際ワークショップを開催し、あるいは、ヨーロッパの研究者が日本でのシンポジウムに招聘された。これらの企画はたいてい文部科学省の助成を受けており、私たちは、その恩恵を受け、たいへん豊かな交流の機会を持つことができた。ただ、時が経つにつれてマンネリ化し、プロジェクトの「国際性」は紙面だけのものになる場合もあったような気がする。たとえば、研究テーマが一方的に日本側で決められ、フランスの研究者の関心とマッチしないこともあった。「日本学」という漠然とした枠組みがあるだけで、研究の目的がはっきりしない場合

や、あるいは、交流に当てられる時間があまりにも短すぎて、相互の理解は後回しにされることもあった。また、発表言語を日本語に限定されることがあったため、フランス人参加者にとって負担が大きく、発表者が少人数に限られ、交流の質にも影響した。このような試みがすべて「国際日本学」の看板の下で行われていたわけではないが、わたしの頭の中では、このいくつかの難点と「国際日本学」ということばが密接に結びついてしまったことは確かである。

もっとも、日本研究における交流が必ずしもすべてこの道を辿ったわけではない。たとえば、国文学研究資料館が二〇一〇～一二年にかけてコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所と共に進めた研究プロジェクトなどは、「国際日本学」的難点のすべてを克服したわけではないが、実りある結果となった。そのプロジェクトとは、一つの大きなテーマ（「集と断片」）を決め、その枠の中で、数回の国際シンポジウムを日本とフランスで交互に開催するというものだった。これが、満足度の高い結果を及ぼした理由は、主に二つあげられる。一つは、プロジェクトリーダーが共同研究を真剣に考え、双方の研究機関の特質を生かしてシンポジウムのテーマを決め、毎回外部の研究者に声をかけつつ内容を充実させたこと。二つめは、一定数の日本人研究者が数回にわたってフランスを訪れ、フランスの研究者と親交を深めたこと、そして相手の研究や方法論に対して理解や関心を示したことである。結局、その企画は『集と断片―類聚と編纂の日本文化』（勉誠出版、二〇一四年）という一冊の本に結実した。

「国文学」というと、非常に専門化が進み、孤立した研究分野を想像するが、むしろ、そのイメージを打ち破るため、外部からの刺激が期待されたのかもしれない。国文学研究資料館とは、それ以降も、文学が私の専門分野でないにもかかわらず、共同研究の機会を得た。それは、お

そらく、それまでの取り組みの成果を生かしているからだろう。最近は資料館が手がけているオンライン英文雑誌*Studies in Japanese Literature and Culture*に論文を載せてもらう経験もできた。この経験や、同誌に掲載された日本人の論文の題名を見て、一番印象に残ったのは翻訳の質である。やはり文学を専門とする人が担い手であるためか、著者の文章を忠実に、かつ上品に表現しようとする配慮が見られる。

このように、今日では各機関の特徴を生かした様々な形態の交流が開花している。それが「国際日本学」の名の下で行われようとなかろうと、従来の日本研究が日増しに国際的になってきているのは確かだろう。その中で、「国際日本文化研究センター」は率先的役割を果たしている。では、このままで、満足すべきだろうか。

私の目には、まだ一つ「国際日本学」の未解決の問題が残っているように思う。それは、次世代の教育である。私はこれまで、日本で教育を受けている大学院生による日本国内での発表会に二度ばかり出席したことがある。一度目は全員日本語で発表し、質疑応答もすべて日本語だった。二度目は全員英語で発表し、私たち「外国人研究者」はそれに対し英語で質問した。すると、質問の意味が通じないケースがほとんどで、通訳が入らないと答えられなかった。「日本」が研究の対象であっても、やはり外国語を話したり、外国語の書物を読んだり、あるいは留学の体験などをしないかぎり、「日本学」の国際化は難しいのではないかと思った。外国語といっても、必ずしも英語だけでなく、中国語、ポルトガル語、オランダ語、韓国語、フランス語等でももちろんいいわけで、それを完璧に話す必要もない。自国以外の国の文化と言語に馴染み、関わり続けていくことは、「日本」という国を見つめる上で学術的にも人間的にも、貴重な体験を与える。少し欲張りすぎかもしれないが、「国際日本学」をこの先推進する際に、ぜひ

考慮に入れていただきたいと思う。

（パリ大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）

（一）以前はパリ第7大学、パリ第7―ドゥニ・ディドロ大学、パリ・ディドロ大学という名前だった。将来さらに変わるかもしれない。

平安時代の女性はどうして漢詩を詠まなくなったのか

張　龍妹

去る四月に「日韓宮廷女性日記文学叢書」三冊の中国語訳を上梓した。平安の巻『紫式部日記』には「蜻蛉日記」「和泉式部日記」「紫式部日記」「更級日記」「讃岐典侍日記」の五作、中世の巻『十六夜日記』には「うたたね」「十六夜日記」「とはずがたり」「竹向きが記」の四作、韓国朝鮮王朝の巻『恨中録』には「癸丑日記」「仁顕王后伝」「恨中録」の三作を収録した。このように日本と韓国の女性が「女手」を使って書いた作品を一緒に翻訳出版しようとしたのは、これらの作品に古代日韓の女性文学の違いが端的に顕れていると思い、また中国にそのような作品はないが、あるとしても朝鮮王朝のような作品しかなかっただろうから、中日韓三国の相違を読みとることができると思ったからである。そのような計画を立てたのはもう一昔前のことになるが、なかなか実現できなかったのは、古典韓国語の翻訳者を見つけることができなかったためである。古典韓国語で書かれた作品はほとんど上掲の三作に尽きるのだが、その研究者がいなかった。それに、業績至上の現在、中国では、このような翻訳をしても研究業績として数えられないため、「無益」な仕事を誰も引き受けてはくれなかった。今回、「癸丑日記」と「恨中録」を翻訳した張彩虹氏は朝鮮文学の出身者で、のちに日本文学に「転向」した方であり、こちらの意向をよく理解してくださった。さらにかつての同級生である王艶麗氏を紹介していただき、「仁顕王后伝」の翻訳を頼むことができた。私自身は「和泉式部日記」と「紫式

部日記」の翻訳を担当し、その他の日本関係の作品はすべて卒業生が担当してくれた。出版してくれたのも卒業生が勤めている重慶出版社である。自分一人の執念のために、多くの方を巻き込んでしまった。感謝の気持ちとともに、「無益」な仕事をさせてしまったことにより、もしかすると皆さんが大学の研究ノルマをうまくこなせなかったのではないかと心配してもいる。また、水際対策のため、日文研に着任する直前、マンスリーマンションで二週間「待機」したことと、着任直後に日文研ハウスに閉じこもってこれらの校正をしていたことも忘れられない思い出となっている。

さて、日本でこのように多数の仮名日記文学が生まれたのは、女性が漢詩文から遠ざかっていたことが原因の一つと思われる。「紫式部日記」には、かの有名な漢才自慢の段落がある。

この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりしとき、聞きならひつつ、かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとくはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸なかりけれ」とぞ、つねになげかれはべりし。

『紫式部日記』（新潮日本古典集成）

父親藤原為時の「口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸なかりけれ」という表現の背後には、女性は漢詩文を嗜むものではないという含みがある。しかし、一方で、紫式部の漢才が買われ、宮の、御前に文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほ

しげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、をととしの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけなながら、教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひしかど、殿もうちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。

『紫式部日記』（新潮日本古典集成）

などと、同僚の女房たちに内緒で、中宮彰子に『白氏文集』の新楽府二巻を進講していた。新楽府は諷諭詩で、もっとも政治性の強い作品群であり、平安朝文人の好みからは逸脱したものである。このような作品を中宮に進講できる式部の漢才は並大抵のものではなかったろう。

しかし、すでに女性の漢才が喜ばれない時代になっていたため、日頃の式部は以下に述べているように、「一」という文字も読めない振りをし、屏風の上に書かれた誰もがわかるようなものでも読めない顔をしていたという。

「男だに才がりぬる人はいかにぞや。はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人のいふを聞きとめてのち、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつにあさましくはべり。読みし書などいひけむもの、目にもとどめずなりてはべりしに、……御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔しはべりしを、

『紫式部日記』（新潮日本古典集成）

このように引っ込み思案なのは、式部が内向的な性格の持ち主であるからだとも思われる。

だが、

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、まな書きちらしはべるほどもよく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく人にことならむと思ひこのめる人はかならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、……

『紫式部日記』（新潮日本古典集成）

「まな書きちらしはべる」などと式部に酷評される清少納言にしても、実は漢詩句をそのまま書くことは極力避けていたようである。『枕草子』には、少納言が自身の漢詩文知識を自慢する章段が少なくないが、かの有名な香炉峰の章段でも直接漢詩を引用しているわけではない。他にも、

見れば、青き薄様に、いと清げに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省花時錦帳下」と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、「いかにかはすべからむ。御前おはしまさば、御覧ぜさすべきを、これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と思ひまはすほどもなく、責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃に、消え炭のあるして、「草の庵を誰かたづねむ」と書きつけて取らせつれど、また返事も言はず。

『枕草子』七十八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」

（新編日本古典文学全集18）

藤原斉信から白居易の詩の一句「蘭省花時錦帳下」が寄せられ、「末はいかに、末はいかに」と責められたにもかかわらず、「これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と思い、漢詩をわざわざ和歌の下句の形に整え、「草の庵を誰かたづねむ」と返している。

また「二月つごもりごろに、風いたう吹きて」の段は、一条朝きっての文人藤原公任との応酬を記述したものである。公任から下句として「すこし春ある心地こそすれ」が寄せられ、「空寒み花にまがへて散る雪に」と上句を詠んで返す。これも「三時雲冷多飛雪、二月山寒少有春」という白居易の詩を模したものであるが、のちに公任と並ぶ時の俊才源俊賢から「なほ内侍に奏してなさむ」と褒められたそうである。

この「内侍」というのは清少納言がかねてから憧れていた職で、彼女が仕える皇后定子の母高階貴子は、円融天皇時代の内侍であった。この高内侍はまた、平安宮廷において最後に漢詩を詠んだ女性であると思われる。

この高内侍について、『栄花物語』では次のように語られている。

この中納言殿（藤原道隆）、才深う、人にわづらはしとおぼえたる人の（高階成忠）、国々治めたりけるが、男子女子どもあまたありける、女の……、先帝（円融）の御時に、おほやけ宮仕に出し立てたりければ、女なれど、真字などいとよく書きければ、内侍になさせたまひて、高内侍とぞいひける、……母北の方の才などの、人より異なりければにや、この殿の男君達も女君達もみな御年のほどよりはいとこよなうぞおはしける。

『栄花物語』巻三「さまざまのよろこび」（新編日本古典文学全集31）

弟の藤原道長は本来入内予定で、一世源氏である源雅信の娘と結婚しているのに対し、兄の道隆は地方官の高階成忠の娘、しかも女官である貴子と結婚している。それ自体がマイナスに評価されがちであるが、定子兄妹が優れていることを「母北の方の才などの、人より異なりければにや」と関連づけ、評価している。

しかし、『大鏡』になると、藤原伊周を語る際にその母に言及し、

母上は高内侍ぞかし。されど、殿上えせられざりしかば、行幸・節会などには、南殿にぞまゐられし。それはまことしき文者にて、御前の作文には、文奉られしはとよ。少々の男にはまさりてこそ聞こえはべりしか。……「女のあまり才かしこきは、もの悪しき」と人申すなるに、この内侍、後にはいといみじう堕落せられにしも、その故とこそはおぼえはべりしか。

『大鏡』「地」道隆（新編日本古典文学全集34）

高内侍が行幸・節会などの際には南殿に召され、少々の男性なら顔負けするような漢詩を献上していたことを述べながら、「女のあまり才かしこきは、もの悪しき」と否定する。しかも「人申すなるに」の、不特定の「人」という語り方は、それがある程度世間的な常識であることを匂わせる。そして、その後の道隆早世による中関白家の没落を、貴子の漢才に起因させている。

『紫式部日記』に「男だに才がりぬる人はいかにぞや。はなやかならずのみはべるめるよ」とあるように、摂関時代には大学寮出身者による立身出世の道もすでに阻まれていた。そのよう

な中で女性の漢才は忌避されるようになり、中関白家の早すぎた没落もそれを後押ししたであろう。『文華秀麗集』『経国集』には、有智子内親王の作品の他に、姫大伴氏、惟氏といった、おそらく女官であった女性が君臣唱和の場で詠んだ漢詩が収録されている。高内侍も同じように活躍した最後の女性かと思われるが、彼女がどのような漢詩を作っていたのかは記録されていないようである。日本の女性が再び漢詩を詠むようになるのは、江戸時代まで待たなければならない。

日本における国風文化の成立についてはさまざまに研究されている。そのうえで、女性がなぜ漢詩を詠まなくなり、仮名文学の創作に向かうようになったのかという点もまた、その成立事情を解明する一つの糸口になるのではないかと思われる。今回の翻訳出版が、漢文化との距離がいかに女性文学に影響を与えていたか、その理解につながることを願っている。

（北京外国語大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）

なぜ「作者」を死なせるのか？

ゴウランガ・チャラン・プラダン

文学を研究する者にとって、どうしても避けられない課題。それは「作品」と「作者」の問題である。作品とは、文学の分野で言えば、言語を使って創られた物語のことであり、芸術の一種である。むろん、口頭で伝えられてきた物語もそのなかに含まれる。そして作品の創作者を作者という。当たり前のことであるが、考えてみれば難解な問題でもある。本エッセイでは、主に後者の「作者」について考えてみたい。

このエッセイを書こうと思った直接のきっかけは二つある。一つは、最近刊行されたハルオ・シラネほか編の『〈作者〉とは何か―継承・占有・共同性』（岩波書店、二〇二一年）（以下、便宜上『〈作者〉とは何か』と表記）という本を読んだこと。二つめは、先日、ある本屋を訪れた時にパンデミック関連の特設コーナーに遭遇したことである。パンデミックのことはあとで述べるとして、まずシラネ編の本から始めよう。

シラネは、ロラン・バルトの「作者の死」論とミシェル・フーコーの「作者とは何か」を取り上げつつ、作者論についてこう述べている。「独創的作品の創造者・所有者としての作者という近代の神話がいまだに根強く働いていることに対して、「作者の死」と「読者の誕生」を宣言し、意味の完結した「作品」から、読者の積極的な読みの行為に開かれ、意味を生成し続ける引用の織物としての「テキスト」へと、文学の営為に対する見方の変更を促した」（v–vi頁）。

この短い引用文には「創造」「所有」「近代」「神話」「読者」「引用の織物」といったいくつかのキーワードが見られる。そしてシラネは示していないが、「所有」と「創造性」と切り離せない「責任」も加えておこう。これらのキーワードは、いずれも作者について考えるときに重要な意義を持っている。

シラネが示した通り、個人が作品の創造者・所有者であるという考えに異を唱えたバルトは、敢えて作者を死なせ、代わりに作品に新たな意味を与える主体として「読者」に注目した。当の文学研究であまりにも自明視されていた「作者の意図」の解明そのものを問題にしたのである。バルトの作者論に違和感を覚えたフーコーは、テキストはいまだ作者の概念に依拠していると反論した。作者名は単なるある個人を示すだけでなく、例えば「シェイクスピア」と言えば「一八世紀のイギリス文学を代表した文学者」であり、『ハムレット』の作者であるという「作者としての機能」も含有しているため、テキストから作者を取り外すことは難しいと指摘した。こうした「個人」を中心に論じられてきた作者論に対し、『〈作者〉とは何か』では東アジアなどの事例を示しながら、「共同」作業としての芸術生産に着目している。ここで先ほど触れたキーワード「創造性」「独自性」「所有権」が問題になってくる。芸術作品が、個人ではなく共同体によるものだとすれば、当然ながらその所有権も共同体にあることになる。そうするとバルトのように作者を死なせなくても済む。『〈作者〉とは何か』は、こうした個人の創造性・所有権という「神話」の解体を目指した。

確かに、近代における印刷技術の進歩につれて、あらゆる芸術は商品化され、そこではじめて所有権や独創性が注目されるようになった。前近代では芸術は権力の象徴であったものの、利益が主な目的ではなかったため、個人の独創性や所有権はそれほど大きな問題にならなかっ

た。日本の事例からすれば、複数の歌人により創られた連歌はこうした所有権や創作性の概念を越えた共同的な創作活動であった。和歌の作成技法である本歌取は、今ではある種の剽窃行為に当たるが、前近代では新たな創作を生み出す方法であった。言い換えれば、剽窃行為のこうした積極的な面はもはや通用しなくなった。匿名による創作についても同じことが言える。前近代に作られた作者未詳の芸術作品は圧倒的に多いが、匿名創作の場合、作者は所有権を放棄すると同時に、創作に対する一切の責任を取らなくても良い。ごく一般的であった前近代のこうした創作手法は、印刷技術の普及と芸術の商品化によって一変する。そしてイギリスやフランスなど西欧の国々における著作権法の改革を経て、一八八六年のベルヌ条約により個人が作品の所有者として認められるようになった。言い換えれば、近代化と共に発展してきた現在の作家論は、芸術の商品化によって支えられている。

問題は、個人が実際にどれほど創造性の所有権を持つのかである。このあいだ、小説家の池澤夏樹が登壇した書評会を拝聴する機会があった。そのときの池澤の言葉が印象に残っている。筆者なりに言い換えれば、次の通りである。「文学作品は海であって、作者の貢献はコップ一杯分の水である」。なるほど、特定の文学作品における作者の独自性は「コップ一杯分」であるという。同じ書評会のもう一人の登壇者であった坪井秀人はさらに一歩進んで「あらゆる文学は翻訳である」とまで主張した。坪井の言及を筆者なりに解釈するならば、あらゆるエクリチュールは、作者が感覚を通して知り得たことを心を通して文章に翻訳したものである。すなわち、文学作品はあくまでも「派生的」なものでしかあり得ない。ここで言う「派生的」は必ずしも消極的な意味ではなく、むしろ派生的だからこそ独自性があるという意味である。坪井によるこうした文学の定義は非常にラジカルである。なぜなら、坪井は池澤の「コップ一杯」

論も認めないからである。いずれにしろ池澤も坪井も、文学の独自性に関する個人の貢献については少なからず否定的な立場を取っている。このような視点は新しいかというとそうでもない。百年前にイギリスのモダニスト詩人エリオットなども同じことを主張していた。だからこそバルトは、テキストを「引用の織物」であると主張した。エクリチュールは、作者の意図を解明するのではなく、創作のなかに盛り込まれた個々の引用の空間を解読する行為であると示した。

それでも不満は残る。なぜなら、これまでの議論は、個人であれ共同体であれ、やはり啓蒙的な人間という普遍的な存在を問題にしないからである。人間を前提とした作者の創造性や独創性に注目し過ぎて、あらゆる芸術作品は人間の外側にあるさまざまな様相によって形成されるという重要なことについて忘れてはいないか。実際、人間のいわゆる創造性や独自性の多くは、人間の管理外にある特定の時代空間によって形成される。作者の創造性という「神話」を解体するためには、作品が特定の社会構造や歴史的な状況によりどのように形成されるのかが問われなければならない。ここでようやく今回のエッセイを書こうとした二つめのきっかけが問題になってくる。

このあいだ家の近くにある本屋を覗いてみる機会があった。みるとパンデミック関連の特設コーナーができている。海外で出版された本の邦訳版も並べてある。ほぼすべての図書が昨年の三月以降に刊行されたもので、なかには海外で出版されたばかりの著書の邦訳もある。パンデミックが世界的に流行し始めてから二、三カ月以内に書かれた本も少なくない。作者がいかなるスピードで原稿を完成させたのか想像に難くない。パンデミック関連の本を執筆した作者にとっては、不幸なパンデミックが本を書くための機会を与えてくれたとも言える。もちろん、

出版社からの介入も無視してはいけない。つまり、コロナ禍がなかったらこれらの本は書かれていなかった可能性が高い。そうすると、あらゆるエクリチュールのように、これらの書籍も「引用の織物」に他ならない。この場合は、歴史からの引用もあれば、世のなかの状況そのものを文章化したものもある。だとすると、パンデミック関連の本は作者が原稿を完成させたとしても、その独自性は「コップ一杯分」の水に過ぎない。それにもかかわらず、その所有権はそれぞれの作者にある。パンデミックは一例に過ぎないが、同じことが「明智光秀」や「渋沢栄一」ブームについても言える。ここで注意すべき点は、これらの本の多くが、ある時代空間のなかで特定の読者を対象に書かれたものだということである。その意味で、時代空間こそが芸術を形成する重要な要件であり、人間の役割はその一部に過ぎない。人間を中心とした作者の問題は、デジタル化が急激に進むなかで改めて問われ始めている。

最近、最初のツイートがオークションに出されたことで話題になった。ツイッターの創業者の一人であるジャック・ドーシーによる最初のツイートが、日本円で言えば約三億円で購入された。このツイートは、デジタル芸術作品として売買され、所有権は購入者に譲渡された。厳密に言えば、この最初のツイートはドーシーという個人が創ったものではない。その背景には多くの技術者が関わり、オープンソースのノウハウも利用されていた。ただ、たまたま最初のツイートがドーシーの手によるものであったために、その所有権もドーシーという個人にあるとされたのである。法律上、全く矛盾はない。だが、ある個人の所有権が認められたことで、ほかの人々の貢献が隠蔽されてしまった。とくにデジタル作品の場合、所有権はより複雑な問題になりかねない。コンピュータ・プログラムで作られた芸術作品の所有権は、誰にあるのか。３Ｄ印刷技術を利用して作られる建築物の著作権は、誰が所有するものなのか。あるいは、自

動的に個人情報を窃盗してビッグデータから作られたＡＩ技術によって創られた芸術作品の著作権などは、簡単に片付けることのできない問題であろう。

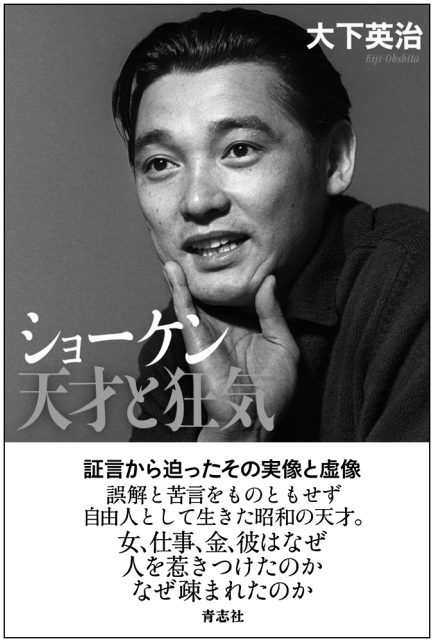
確実な解決策はないが、問題点ははっきりしている。それは、人間中心の作者論を越えた概念が必要ということだ。では、人間を中心としない作者論とはいかなるものであろうか。あらゆる事物を人間の視点から考えず、人間は広い世界の一部に過ぎないという思考がその出発点であろう。今必要とされるのは、こうした惑星的な思考だ。とはいっても、人間と非人間の境界線を越えた作者論は新しいかというとそうでもない。二～三世紀に成立したと言われる『ジャータカ物語』には、話すことができる鳥類や動物が数多く登場する。それは、この作品を編んだ当の作者が単に鳥類や動物を哀れに思って人間と同じく話せる機能を与えたのではなく、むしろ人間の声だけでは語り切れない、人間の欠陥を補う存在として登場させたのである。こうした作者論により、前近代の日本における仏や神のように、あるいは忘れられた妖怪のように、人間の別の一面が顕在化され、人間と非人間といった二項図式的な考え方を超越できることになる。人間は広い世界の支配者ではなく、あくまでもその一部でしかないという認識こそが、新たな作者論の始まりではないか。そのような作者論では、人間の独自性や創造性は求められず、作者の死が問題になることもない。

（国際日本文化研究センター機関研究員）

書評

大下英治『ショーケン　天才と狂気』（青志社、二〇二一年五月、四六四頁）

磯前順一



二〇一九年三月二六日に萩原健一（一九五〇―二〇一九）が亡くなった。六八歳だった。死後、多くの雑誌やムックが特集を組んだ。その内容をかいつまんで紹介すれば、次のようなものになる。一九六七年にザ・テンプターズのリードボーカルでデビュー。アイドル路線に納得できず、ひとり解散を願うものの、「エメラルドの伝説」が大ヒット。ザ・タイガースの沢田研二とともに、「ジュリー、ショーケン」と並び称される。グループサウンズ衰退後、一九七一年に、沢田研二やザ・スパイダースの井上堯之らとスーパーバンド、PYGを結成

するも、二番手的な地位に甘んじることができず、本人談によれば脱退。

映画監督を目指すが、主演俳優の穴埋めで一九七二年に岸惠子との共演映画『約束』（斎藤耕一監督）で本格的な銀幕デビュー。一九七四年には神代辰巳監督の『青春の蹉跌』を桃井かおりと熱演し、しらけ世代の若者から熱狂的な支持を得る。テレビドラマでは、一九七二―七三年に井上堯之バンドが音楽を担当した『太陽にほえろ』でかけだし刑事役、一九七四―七五年には深作欣二らが監督を担当した『傷だらけの天使』で水谷豊とのコンビで、ひたむきで傷つきやすいアウトローを好演。一九七五―七七年には倉本聰脚本『前略おふくろ様』でふたたび桃井と共演し、地方から上京した若者の繊細な内面を表現した。この時ショーケン、弱冠二七歳であった。一九七〇年代前半の日本版ニューシネマの旗手といったところであろうか。しらけ世代の空虚感をジュリーが歌で表現したとするならば、ショーケンはそれを映像のなかで描いて見せたのである。

本書の最初の二章「スター、ショーケン」「時代を背負う」は、こうした時期のショーケンの活躍に焦点を当てている。しかし、他の類書に比べて異彩を放つのは、初期の輝きが色あせた後の約四十五年間の苦闘の様子をその三倍もの紙幅、六章分を充てて描いていることだ。第三章「てっぺん」、第四章「一人ぼっち」を境として、ショーケンの後半生は暗転していく。

黒澤明監督の『影武者』（一九八〇年）、高橋惠子（当時は関根恵子）との再演『魔性の夏』（蜷川幸雄監督、一九八一年）、ジュリーおよび田中裕子との共演『カポネ大いに泣く』（鈴木清順監督、一九八五年）の頃である。確かに熱演ではあるのだろうが、ショーケンが演じる必要のある役なのかどうかを観客にうまく説得できていないように見えてしまう。彼と並ぶしらけ世代のアイコン、ジュリーの歌であれば、作詞家の安井かずみが紡ぎ出す繊細な若者の恋愛か

ら、阿久悠が描く大人の男のナルシシズムを戯画化して見せた世界への転換期であった。時代の虚像であることに対して、どこか冷めた距離をとっていたジュリーに対して、ショーケンはその虚像を自分の身を以て生きようとしたのだ。

ショーケンにとって暗転する契機となったのは、一九七七年にいしだあゆみと共演したテレビドラマ『祭ばやしが聞こえる』であろう。グループサウンズ時代の仲間、柳ジョージが音楽の第一線にカムバックする機会を開きはしたものの、話も画面も暗い印象ばかりが残る作品で、以前のようには視聴率も伸びなかった。この頃、ショーケンはＰＹＧ以来所属していた渡辺プロダクションから独立する。この辺りから、本書の主題が鮮明に浮かび上がってくる。葛藤である。自意識と社会状況のずれが生み出す葛藤だ。

何の後ろ盾もない若者が社会の底辺に這いつくばっても生きようとする、あるいは社会の網の目から逃れ出ようとする。ショーケンが演じてきた役は、七〇年安保で自分たちの理想とする社会を夢見た若者たちの挫折感を体現するものであった。実際、彼にはそうした役が、地で演じているかのように似合っていた。

それまでのショーケンにとって、葛藤とは自分自身と社会の間に存在した。他方で、表現者ショーケンと本名萩原敬三の間にはさほど大きな矛盾は生じていないようにも思われた。しかし一九八〇年前後から、ショーケンであることと萩原敬三であることの間に葛藤を抱え込むように見えてくる。まず、バブル経済に向かってひた走る日本社会のなかに、社会体制に馴染むことのできないアウトローたちの居場所がなくなっていく。

この時期は、再開した音楽活動に本格的に没頭した時期であった。俳優の演技と歌のステージがまじりあい、独自のロック音楽が井上堯之らのバックアップで展開されていった。「ショー

ケンは俳優じゃないね」という千葉真一の評価は、良くも悪くもショーケンがミュージシャンとして演技をしていたこと、俳優として音楽を演じていたことを示している。しかし、今の地点から冷静になって音だけ聞いてみると、ショーケンのボーカリストとしての力量はアルバム『熱狂雷舞』（一九七八年）を最後の輝きとして失墜していく。そして、一九八〇年代末をもって音楽活動は再度停止となる。

その頃、テレビドラマ『豆腐屋直次郎の裏の顔』（一九九〇―九二年）、『課長サンの厄年』（一九九三―九四年）、山口智子との共演が話題になった映画『居酒屋ゆうれい』（渡邊孝好監督、一九九四年）では、ショーケン復活を印象づける好演をしているものの、この主人公たちの違和感は既存社会の体制のなかに吸収されてしまい、現代版『傷だらけの天使』と呼ぶには、その存在は小市民にしか思えなくなってしまう。

おそらく、沢田研二演じる映画、長谷川和彦監督の『太陽を盗んだ男』（一九七九年）あたりが日本映画としてもその最後を飾る作品となるのではないか。しかも、その最後はだれ一人この世界に信用できる相手を失った主人公が、自分の作った原爆で世界もろとも自分も吹き飛ばすという孤独な物語であった。ジュリーは例によってそれを飄々と演じていた。しかし当初、主役に予定されていたのはショーケンであったという。彼がこの物語を演じていたならば、どんな物語になったのかと興味がそそられる。

変わりゆく社会のなかで、自分の演じる役柄を見失っただけではない。芸能界のなかでも、自分がいつしか社会的にエスタブリッシュされたことを器用に受け止められないショーケンは、若い頃と同じようにスタッフや監督にぶつかり、不協和音を発してしまう。いつしか「むずかしい人」という評価ができてしまう。プロデューサー的な感覚を欠く彼にとって、大手の

マネージメント会社を離れた後はそのかじ取りで迷走していく。第五章「復活の日」、第六章「熟年時代」、第七章「再度の転落」では、その辺りのショーケンの葛藤が描かれる。

本書は、ショーケンをピカレスク・ロマンのヒーローとして称揚するのでもなく、社会人としての失格な面のみを暴き出すのでもない。その葛藤を抱え込むからこそ、それをエネルギーとして彼はいつの時代にも良質な表現者として存在できたことを教えてくれる。それは、かつて六〇年代末に自由の王国を夢見た若者が、今度は自分が若者たちに突き上げられる年齢に差し掛かった時に、どのような役割を自分に与えるか。かつて夢見た若者たちの、大人になったときの人生の難しさを示しているように思われる。

一九八三年に大麻不法所持で逮捕されたときに、ショーケンは病床の母親から、「お前はどこにいるんだ」と詰問されたという。その時、答えることができなかったという。しかし、晩年に四度目の結婚をしてからのショーケンは、穏やかな心持で病魔に侵された闘病生活を最後まで送ったという。ようやく人生の最後にショーケンは自分の居場所を見つけたのかもしれない。ジュリーが大きな犠牲を払ってまで、田中裕子という伴侶を見つけたようにである。第八章「男に惚れられる男だった」では、この時期のことが扱われているが、むしろそれは最後の自伝『ショーケン最終章』（講談社、二〇一九年）のほうが美談としてはふさわしいだろう。

返す返すも、水谷豊との共演で再企画された映画『傷だらけの天使』が流産したのは残念なことであった。もし、実現したならば、若き日のショーケンの演じる主人公、木暮修のその後の人生を彼はどのように演じたのだろうか。問題はどのようなかたちで居場所を見つけたのかなのだ。それとも、今も居場所のないままにさすらう人生をショーケンは再び演じようとしたのだろうか。

彼がバンドの一員としてデビューしたザ・テンプターズのヒット曲に「涙のあとに微笑みを」（一九六八年）がある。あの曲を歌うショーケンの笑顔には空虚だけれども、何も持たないがゆえにつきぬけた明るさがあった。戦後の焼け跡の青空のように。さよなら、ショーケン。長い間、ありがとう。

（国際日本文化研究センター教授）

絵と言葉でひろがる近世・近代の文化圏』（著書欄参照）
インタビュー「鈴木大拙親子の研究書　舞台に」『京都新聞』 2021年3月9日

マルクス・リュッターマン

●論文

「二つの『中世』における『ウルクンデ＝シャルト』vs『文書』 その概念的対置およびシンボル形式的比較によせて」河内祥輔、小口雅史他編『儀礼・象徴・意思決定　日欧の古代・中世書字文化』思文閣出版　2021年1月　169頁～180頁

劉　建輝

●著書

『마성의도시상하이 ―― 일본지식인의 '근대' 체험』昭明出版　2020年7月　288頁（韓国語）

『CHINA GRAPHY ―日本のまなざしに映った中国』（深尾葉子、伊藤謙と共著）国際日本文化研究センター　2021年1月　100頁

●論文

「反转的现代主义―租借地大连的都市空间与文化生产」『東北亜外語研究』2020年第2期　大連外国語大学　2020年6月　18頁～23頁（依頼論文）（中国語）

「初めに言葉ありき―一九世紀初頭来華プロテスタント宣教師の文化活動とその影響」『『新世紀人文学論究』（田中寛先生古希・退職記念論集）』第4号特別記念号　大東文化大学　2021年3月　45頁～52頁（依頼論文）

「大連の近代都市空間形成とその文化生産」『北東アジア研究』（別冊6）　島根県立大学北東アジア地域研究センター　2021年3月　219頁～226頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「学术主持人语・日本文学中的中国城市表象」『東北亜外語研究』2020年第2期　大連外国語大学　2020年6月（中国語）

「日中200年―文化史からの再検討」『SGRAレポート』NO. 76　渥美国際交流財団関ログローバル研究会（SGRA）　2020年6月

講演資料等「私の歩んできた道」大東文化大学『新世紀人文学研究会』新世紀人文学研究会　2021年3月

講演資料等「コロナ時代からの人文主義―課題と展望―」大東文化大学『新世紀人文学研究会』新世紀人文学研究会　2021年3月

「来舶清人研究ノート―附『来舶清人参考文献』『来舶清人一覧表』」『日本研究』第62集　国際日本文化研究センター　2021年3月

エッセイ「女と妖怪―うぶめを中心に」染谷智幸、金文京、小峯和明、ハルオ・シラネ編『東アジアの自然観―東アジアの環境と風俗』4　文学通信　2021年3月

エッセイ「シドニーの「ジャパン・スーパーナチュラル」展に関わって」「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン編］『環太平洋から「日本研究」を考える』国際日本文化研究センター　2021年3月

会議報告等「シンポジウム「災いから考える文化のレジリエンス」」『総研大文化フォーラム2020報告集：文化のレジリエンスとは？：〈異〉をつなぎ、未来へ』 2021年3月

山田　奨治

●著書

『鈴木大拙　禅を超えて』（ジョン・ブリーンと共編著）思文閣出版　2020年11月　423頁

『文化・情報の結節点としての図像―絵と言葉でひろがる近世・近代の文化圏』（石上阿希と共編著）晃洋書房　2021年3月　146頁

●論文

「テレビCMが育てた大林宣彦」『ユリイカ』第52巻第10号（9月臨時増刊号）青土社　2020年8月　78頁～84頁（依頼論文）

「父としての鈴木大拙」『現代思想11月臨時増刊号　鈴木大拙生誕150年　禅からZenへ』 青土社　2020年10月　165頁～172頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「アメリカ大衆文化への鈴木大拙の影響」山田奨治、ジョン・ブリーン編『鈴木大拙　禅を超えて』思文閣出版　2020年11月

（翻訳）ジェームズ・ドビンズ「鈴木大拙と動物愛護」山田奨治、ジョン・ブリーン編著『鈴木大拙　禅を超えて』思文閣出版　2020年11月

（翻訳）アリス・フリーマン「鈴木大拙による「日本的霊性」と仏教の戦争責任への問い――占領期日本のもうひとつの歴史（1945–1952）」山田奨治、ジョン・ブリーン編著『鈴木大拙　禅を超えて』思文閣出版　2020年11月

解説「浮世絵の顔」こどもくらぶ編『ビジュアル　顔の大研究』丸善出版　2020年12月

インタビュー「懐かしのテレビ脚本　京に」『京都新聞』（夕刊） 2020年12月22日

「共同研究会「縮小社会の文化創造：個・ネットワーク・資本・制度の観点から」について」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年1月

「はじめに　ことばとイメージの文化圏」『文化・情報の結節点としての図像―

●論文

「明治の国楽創成と音楽効用論―伊澤修二・神津仙三郎の身体観をめぐって―」瀧井一博編著『「明治」という遺産―近代日本をめぐる比較文明史』ミネルヴァ書房　2020年10月　214頁～230頁

●その他の執筆活動

インタビュー「日文研の人文知コミュニケーター」『朝日新聞』（夕刊）　2020年4月16日

インタビュー「「音楽とは何か」に音楽療法史から迫る」『YAMAHAオンラインマガジン「Inspired」』YAMAHA　2020年5月

「人文学研究と社会をむすぶ」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2020年8月

「〈口絵解説〉ユージーン・アルノー作曲〈ミカド・ポルカ〉、ルドルフ・ディットリヒ作曲〈落梅〉」『日本研究』第61集　国際日本文化研究センター　2020年11月

「明石博高と舎密局―お雇い外国人たちとの関係を軸に」「明石博高と近代医療」「創業の背景―京都の近代化のなかで―」「資料解説」『企画展「明石博高と島津源蔵―京の近代科学技術教育の先駆者たち」』（著書欄参照）

「医療文化史　宗田文庫が伝え」『京都新聞』　2021年1月22日

「「主題と変奏―臨床便り」第48回―音楽と慰め」『臨床心理学』編集委員会『臨床心理学』第21巻第2号　金剛出版　2021年3月

「〈口絵解説〉江戸期のくすり関連資料（日文研「宗田文庫」より）」『日本研究』第62集　国際日本文化研究センター　2021年3月

安井　眞奈美

●論文

「小特集「思いがけないお産の民俗」から見えてくること」「「思いがけないお産」の研究と今後の課題」『日本民俗学』303　日本民俗学会　2020年8月　57頁～59頁、128頁～133頁

「特集について―比較日本文化研究という視座」『比較日本文化研究』20　比較日本文化研究会　2020年10月　7頁～18頁

「出産と妊産婦・胎児の死―四半世紀の研究（1995–2020）」『比較日本文化研究』20　比較日本文化研究会　2020年10月　32頁～45頁

“Imagining the Spirits of Deceased Pregnant Woman: Analysis of Illustrations of Ubume in Early Modern Japan.” *Japan Review* vol. 35, December 2020, pp. 91–112（査読付き）（複数言語）

●その他の執筆活動

エッセイ「土方久功とパラオのストーリーボード」『季刊民族学』173号　国立民族学博物館　2020年7月

の文化圏』晃洋書房　2021年3月　122頁～132頁（査読付き）

●その他の執筆活動

「解題「ビラ・チラシのナンセンスさ」」（日文研大衆文化研究プロジェクト編［編集委員：伊藤慎吾、内田力、佐野明子、大塚英志］）『日本大衆文化論アンソロジー』太田出版　2021年2月

松木　裕美

●著書

『環太平洋から「日本研究」を考える』（「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、ゴウランガ・チャラン・プラダンと共編］）国際日本文化研究センター　2021年3月　192頁（複数言語）

『世界の日本研究』2020（編集）国際日本文化研究センター　2021年3月　158頁（複数言語）

●論文

“Le jardin japonais comme champ des enjeux internationaux : tendances récentes de la recherché.” Judith Delfiner ed., *Perspective* 2020-1, Institut national d’histoire de l’art, June 2020, pp. 257–266.（査読付き）（フランス語）

●その他の執筆活動

「日本と世界をつなぐ」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2020年8月

松田　利彦

●著書

『일본의 조선 식민지 지배와 경찰［日本の朝鮮植民地支配と警察］』（李鐘旼、李炯植、金玄訳）景仁文化社　2020年5月　730頁（韓国語）

●論文

「統治機構와 官僚・警察・軍隊［統治機構と官僚・警察・軍隊］」日本植民地研究会編『日本植民地研究의 論点［日本植民地研究の論点］』ソファ　2020年7月　38頁～50頁（韓国語）

「戦後日本の朝鮮植民地支配問題認識―日韓国交未回復期（1945～65年）を中心に」馬暁華編『新たな和解の創出 グローバル化時代の歴史教育学への挑戦』彩流社　2020年8月　77～101頁

光平　有希

●著書

『企画展「明石博高と島津源蔵―京の近代科学技術教育の先駆者たち―」』（松田清、フレデリック・クレインス、川勝美早子と共編著）国際日本文化研究センター　2021年1月　136頁

社　2020年9月　35頁～65頁（依頼論文）

「勲章外交：明治天皇と世界の君主たち」瀧井一博編著『「明治」という遺産―近代日本をめぐる比較文明史』ミネルヴァ書房　2020年10月　1頁～21頁（依頼論文）

“The Quality of Emperorship in 21st Century Japan: Reflections on the Reiwa Accession.” Mark Selden ed., *Asia Pacific Journal Japan Focus*, Volume 18, Issue 12, Number 1, Asia Pacific Journal Japan Focus, June 2020, PP. 1–23.（査読付き）

“Sannō Matsuri: Fabricating Festivals in Modern Japan.” Elisabetta Porcu and James Mark Shields, eds., *Journal of Religion in Japan* Volume 9, Issue 1–3, Brill, August 2020, pp. 78–117.（依頼論文・査読付き）

●その他の執筆活動

“Introduction: In Search of the Kyoto Modern.” *Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan*.（著書欄参照）

“Preface” *Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan*.（著書欄参照）

「新型コロナウイルスの日々：日本とイギリスの間」『日文研』65号　2020年9月

「日文研の日々」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年3月

インタビュー「人コミュ通信 vol. 15　国際的・学際的な日本研究を体現、そしてその重要性を繋ぐ。―ジョン・ブリーン教授へのインタビュー」『国際日本文化研究センターウェブサイト』国際日本文化研究センター　2021年3月

前川　志織

●著書

『日本大衆文化史』（日文研大衆文化研究プロジェクト編著）KADOKAWA　2020年9月　358頁

『明治後期文芸雑誌表紙・一條成美挿画コレクション』（編集）国際日本文化研究センタープロジェクト推進室　2021年3月　99頁

●論文

「私と「アマチュア」の時代（1910–1920）」『日本大衆文化史』（著書欄参照）128頁～176頁（デザイン領域）

「画家と画工―広告の図案制作者たち」『日本大衆文化史』（著書欄参照）　184頁～191頁

「洋画家・岸田劉生の初期の制作にみる古典性の投企―美術の複製メディアを手がかりに」荒木浩編『古典の未来学―Projecting Classicism』文学通信　2020年10月　517頁～535頁

「戦間期東アジアにおける森永製菓の新聞広告と広告戦略」石上阿希、山田奨治編著『文化・情報の結節点としての図像―絵と言葉でひろがる近世・近代

2021年3月　264頁

●論文

「コラム「詩」」紅野謙介、内藤千珠子、成田龍一『〈戦後文学〉の現在形』平凡社　2020年10月　73頁～77頁（依頼論文）

「ジャポニスム／モダニズムの交差点としての〈和歌歌曲〉――和歌翻訳そしてストラヴィンスキー、山田耕筰らの音楽制作」（池澤夏樹、坪井秀人、林圭介、佐藤美希、内山明子、邵丹、佐藤＝ロスベアグ・ナナ、管啓次郎と共著）『翻訳と文学』みすず書房　2021年3月　27頁～84頁（依頼論文）

「転向を語ること―小林杜人とその周辺」Diego Cucinelli and Andrea Scibetta, eds., *Tracing Pathways* 雲路：*Interdisciplinary Perspectives on Modern and Contemporary East Asia*, Firenze University Press, March 2021, pp. 67–88.（依頼論文・査読付き）

●その他の執筆活動

「概観2020年　日本文学《近代》」日本文藝家協会編『文藝年鑑2020』新潮社　2020年7月

「今取り組んでいる課題テーマ」『文献継承』第37号　金沢文圃閣　2021年3月

ジョン・ブリーン

●著書

Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan. co-edited with Maruyama Hiroshi, Takagi Hiroshi eds., Renaissance Books, July 2020, 254 pages.

『鈴木大拙　禅を超えて』（山田奨治と共編著）思文閣出版　2020年10月　450頁

●論文

「鈴木大拙と神道　批判の構造」『鈴木大拙　禅を超えて』（著書欄参照）　287頁～291頁

"Ornamental Diplomacy: Emperor Meiji and the Monarchs of the Modern World." Robert Hellyer and Harald Fuess eds., *The Meiji Restoration: Japan as a Global Nation*, Cambridge University Press, April 2020, pp. 232–248.（依頼論文・査読付き）

「令和の始まりに見る天皇制の現在」『ブリタニカ国際年間』ブリタニカ・ジャパン　2020年5月　119頁～123頁（依頼論文）

"Performing History: Festivals and Pageants in the Making of Modern Kyoto." *Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan*,（著書欄参照）pp. 33–64.（査読付き）

「天皇、神話、宗教：明治初期の宗教政策」島薗進、末木文美士、大谷栄一、西村明編『近代日本宗教史　第1巻　維新の衝撃――幕末～明治前期』春秋

瀧井　一博

●著書

『「明治」という遺産―近代日本をめぐる比較文明史』（編著）ミネルヴァ書房　2020年10月　562頁

●論文

「知識交換の明治―大久保政権再評価への試論」『「明治」という遺産―近代日本をめぐる比較文明史』（著書欄参照）　152頁～169頁

●その他の執筆活動

「現代のことば」（連載6回）『京都新聞』（夕刊）　2020年4月1日～2021年2月9日

「政治学の古典を読む（三一）政治史の特殊性（坂野潤治『明治憲法体制の確立―富国強兵と民力休養』、東京大学出版会、一九七一年）」『究』第110号　ミネルヴァ書房　2020年5月

（翻訳）C.シュミット、F.ハルトゥング、E.カウフマン『第二帝政の国家構造とビスマルクの遺産』（初宿正典編訳　栗原良子、柴田尭史、宮村教平と共訳）風行社　2020年8月

「政治学の古典を読む（三二）原罪としての国家（エンゲルス（戸原四郎訳）『家族・私有財産・国家の起源』岩波文庫、一九六五年）」『究』第113号　ミネルヴァ書房　2020年8月

「政治学の古典を読む（三三）自由と国家（J. S. ミル（関口正司訳）『自由論』岩波文庫、二〇二〇年）」『究』第116号　ミネルヴァ書房　2020年11月

「知識国家への道しるべ」『アステイオン』　CCCメディアハウス　2020年11月

書評「坂野潤治著『明治憲法史』」『東京新聞』　2020年12月5日

「「憲法政治」への道―伊藤博文に学ぶ」、猪木武徳編『高校生のための 人物に学ぶ日本の政治経済史（シリーズ・16歳からの教養講座2）』ミネルヴァ書房　2021年1月

「政治学の古典を読む（三四）権力の分割とひとつの国制（A. ハミルトン、J. ジェイ、J. マディソン著（斎藤眞、中野勝郎訳）『ザ・フェデラリスト』岩波文庫、一九九二年）」『究』第119号　ミネルヴァ書房　2021年2月

「伊藤博文」「山県有朋」「井上毅」「穂積八束」「美濃部達吉」長妻三佐雄、植村和秀、昆野伸幸、望月詩史編著『ハンドブック近代日本政治思想史：幕末から昭和まで』ミネルヴァ書房　2021年2月

坪井　秀人

●著書

『二十世紀日本語詩を思い出す』思潮社　2020年9月　459頁

『翻訳と文学』（佐藤＝ロスベアグ・ナナ編、池澤夏樹、林圭介、佐藤美希、内山明子、邵丹、佐藤＝ロスベアグ・ナナ、管啓次郎と共著）みすず書房

書評「中元崇智著『板垣退助―自由民権指導者の実像』中公新書」『朝日新聞』2021年1月23日

書評「火坂雅志著『北条五代』朝日新聞出版」『朝日新聞』 2021年2月6日

書評「森本あんり著『不寛容論―アメリカが生んだ「共存」の哲学』新潮選書」『朝日新聞』 2021年2月20日

書評「安田峰俊著『現代中国の秘密結社―マフィア、政党、カルトの興亡史』中央公論新社」「安田峰俊著『「低度」外国人材』KADOKAWA」『朝日新聞』2021年3月20日

白石　恵理

●著書

『環太平洋から「日本研究」を考える』(「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダンと共編］）国際日本文化研究センター　2021年3月　192頁（複数言語）

●論文

「明治期キリシタン版画にみる日本文化の表象」『DNP文化振興財団 学術研究助成紀要』第3号　2020年11月　78頁～95頁（依頼論文）（複数言語）

「「ド・ロ版画」にみる日本文化の受容と展開」内田慶市編著『文化の翻訳としての聖像画の変容　ヨーロッパ－中国－長崎』関西大学東西学術研究所／遊文舎　2021年2月　29頁～48頁（依頼論文）（複数言語）

●その他の執筆活動

（翻訳）アンドレ・ヘイグ「アジア・環太平洋地域の帝国とディアスポラに関する共同研究基盤としてのハワイ」『環太平洋から「日本研究」を考える』（著書欄参照）

（翻訳）西野亮太「太平洋戦争の記憶と歴史を可視化する――南太平洋から見る東アジア」『環太平洋から「日本研究」を考える』（著書欄参照）

関野　樹

●論文

“Time Information System, HuTime - A Visualization and Analysis Tool for Chronological Information of Humanities.” *Proceedings of Digital Humanities Conference* 2020 (DH2020), Digital Humanities Conference 2020, July 2020, 1 page.（査読付き）

「あいまいな時間の処理」浅見泰司、薄井宏行編著『あいまいな時空間情報の分析』古今書院　2020年12月　100頁～110頁

「HuTimeを使った年表・時系列グラフの共有」『情報処理学会シンポジウムシリーズ じんもんこん2020論文集』 情報処理学会　2020年12月　101頁～106頁（査読付き）

「色川文書」所収の忠義王文書に関する一考察―受容過程を中心に―」神奈川大学日本常民文化研究所『熊野水軍小山家文書の総合的研究』2021年3月115頁～129頁

●その他の執筆活動

対談「「なぜ?」を問わない歴史教育の愚（ニッポン教育再生会議）（出口治明と）」『文藝春秋』98(4)　文藝春秋　2020年4月

書評「多湖淳著『戦争とは何か―国際政治学の挑戦』中公新書」『朝日新聞』2020年4月4日

書評「坂靖著『ヤマト王権の古代学―「おおやまと」の王から倭国の王へ』新泉社」『朝日新聞』 2020年4月11日

書評「木下聡著『斎藤氏四代―人天を守護し、仏想を伝えず』ミネルヴァ書房」『朝日新聞』 2020年4月25日

書評「春日太一著『時代劇入門』角川新書」『朝日新聞』 2020年5月9日

書評「佐藤信編『古代史講義【宮都篇】』ちくま新書」『朝日新聞』 2020年5月16日

書評「馬部隆弘著『椿井文書―日本最大級の偽文書』中公新書」『朝日新聞』2020年5月23日

書評「浮世博史著『もう一つ上の日本史』幻戯書房」『朝日新聞』 2020年6月6日

書評「山本博文著『徳川秀忠』吉川弘文館」「山本博文著『「関ヶ原」の決算書』新潮新書」『朝日新聞』 2020年6月13日

書評「黒田日出男著『岩佐又兵衛風絵巻の謎を解く』角川選書」『朝日新聞』2020年6月27日

書評「石井妙子著『女帝　小池百合子』文藝春秋」『朝日新聞』 2020年7月18日

書評「山田昌弘著『日本の少子化対策はなぜ失敗したのか？―結婚・出産が回避される本当の原因』光文社新書」『朝日新聞』 2020年8月1日

書評「樋口耕太郎著『沖縄から貧困がなくならない本当の理由』光文社新書」『朝日新聞』 2020年9月5日

書評「一ノ瀬俊也著『東條英機―「独裁者」を演じた男』文春新書」『朝日新聞』 2020年9月19日

書評「岡本隆司著『「中国」の形成―現代への展望』岩波書店」『朝日新聞』2020年10月24日

書評「君塚直隆著『悪党たちの大英帝国』新潮社」『朝日新聞』 2020年10月31日

「歴史学界と偽書」『ユリイカ』第52巻第15号　青土社　2020年11月

書評「平山優著『戦国の忍び』角川新書」『朝日新聞』 2020年11月21日

書評「北岡伸一著『明治維新の意味』新潮選書」『朝日新聞』 2020年12月12日

「歩くコンピュータ」『京都新聞』 2020年6月18日
「古代史の核心×革新1–4」『京都新聞』他各地方新聞　2020年12月20日～2021年3月20日

フレデリック・クレインス

●著書
『企画展「明石博高と島津源蔵―京の近代科学技術教育の先駆者たち」』（松田清、川勝美早子、光平有希と共編著）国際日本文化研究センター　2021年1月　136頁
『ウィリアム・アダムス―家康に愛された男・三浦按針』筑摩書房　2021年2月　304頁

●論文
「オランダ商館長の記録にみる日本の自然災害」『學士會会報』No. 944　学士会　2020年9月　24頁～30頁（依頼論文）
「ウィリアム・アダムス（三浦按針）は何を成し遂げたのか――日欧交渉史における役割の再検討――」『日本関係欧文史料の世界』 国際日本文化研究センター　2021年3月　1頁～9頁

●その他の執筆活動
「祇園祭との不思議な縁（現代のことば）」『京都新聞』（夕刊） 2020年7月13日
「フロイス著『1588年日本年報』ローマ、1590年」『日文研』65号　国際日本文化研究センター　2020年9月
「中秋の名月に思うこと（現代のことば）」『京都新聞』（夕刊） 2020年9月9日
「門掃き修行（現代のことば）」『京都新聞』（夕刊） 2020年11月11日
「天明の大火：教訓伝える文学の力（日本人の忘れ物知恵会議）」『京都新聞』2020年12月9日
「底冷えと京町家（現代のことば）」『京都新聞』（夕刊） 2021年1月19日
「ポンペ・ファン・メールデルフォールトによる近代科学教育の創始」「資料解説」『企画展「明石博高と島津源蔵―京の近代科学技術教育の先駆者たち」』（著書欄参照）
「御土居と京都らしさ（現代のことば）」『京都新聞』（夕刊） 2021年3月17日

呉座　勇一

●著書
『教養としての歴史問題』（前川一郎編著、倉橋耕平、辻田真佐憲と共著）東洋経済新報社　2020年8月　258頁

●論文
「宣伝される大衆僉議―中世一揆論の再構築」荒木浩編『古典の未来学―Projecting Classicism』文学通信　2020年10月　406頁～416頁

篇】（上）』ちくま新書　2020年8月　100頁～115頁（依頼論文）
「防衛分担金をめぐる日米関係」『防衛学研究』第63号　日本防衛学会　2020年9月　5頁～27頁（依頼論文）
「自治体による職員派遣の展開」五百旗頭真、御厨貴、飯尾潤監修、ひょうご震災記念21世紀研究機構編『総合検証　東日本大震災からの復興』岩波書店　2021年2月　290頁～306頁（依頼論文）
「小泉純一郎――「市民感覚」の政治、制度的権力の勝者」宮城大蔵編『平成の宰相たち――指導者16人の肖像』ミネルヴァ書房　2021年3月　209頁～243頁（依頼論文）
「野田佳彦――統治責任の模索」宮城大蔵編『平成の宰相たち――指導者16人の肖像』ミネルヴァ書房　2021年3月　389頁～417頁（依頼論文）
「冷戦下の日本外交の出発点　事例：サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約の選択」大矢根聡編著『戦後日本外交からみる国際関係』ミネルヴァ書房　2021年3月　3頁～11頁（依頼論文）
●その他の執筆活動
書評「板山真弓著『日米同盟における共同防衛体制の形成――条約締結から「日米防衛協力のための指針」策定まで』（ミネルヴァ書房、2020年）」『アメリカ太平洋研究』第21号　東京大学アメリカ太平洋研究センター　2021年3月

倉本　一宏

●著書
『現代語訳　小右記10　大臣闕員騒動』吉川弘文館　2020年4月　317頁
『テーマで学ぶ日本古代史　政治・外交編』（佐藤信監修、新古代史の会編、仁藤敦史、他と共著）吉川弘文館　2020年5月　223頁
『旅が好きだ！21人が見つけた新たな世界への扉』（角田光代、他と共著）河出書房新社　2020年6月　190頁
『日記で読む日本史5 日記から読む摂関政治』（監修、古瀬奈津子、東海林亜矢子著）臨川書店　2020年7月　228頁
『現代語訳　小右記11 右大臣就任』吉川弘文館　2020年10月　277頁
『古事談 ビギナーズ・クラシックス 日本の古典』KADOKAWA　2020年11月　336頁
●その他の執筆活動
「平安貴族列伝（10）～（28）」『JBpress』日本ビジネスプレス　2020年4月～2021年3月
「津というまち」『京都新聞』　2020年5月18日
「伴・部・品部・部曲について」『日本史の研究』269　山川出版社　2020年6月

ション』国際日本文化研究センター　2021年3月　4頁～6頁（依頼論文）
「蘭学としての「漫画」 近現代略画・まんが入門書におけるライラッセ「大絵画本」の系譜」明石陽介編『ユリイカ』第53巻第4号　青土社　2021年3月　157頁～170頁（依頼論文）
●その他の執筆活動
「まんがでわかるまんがの描き方」（砂威、浅野龍哉と共著）『ヤングエース』KADOKAWA　2020年4月
書評「伊藤慎吾『南方熊楠と日本文学』」『週刊ポスト』 2020年5月
書評「ミヒャエル・H・カーター『SS先史遺産研究所アーネンエルベ』」『週刊ポスト』 2020年6月
インタビュー「耕論　新型コロナ「新しい生活様式」の圧　日常に入り込んだ公権力」『朝日新聞』 2020年6月20日
「まんが訳酒呑童子絵巻記事　絵巻物　漫画に再構成」『読売新聞』（夕刊）2020年7月14日
インタビュー「「コロナ禍」への視線 「銃後ごっこ」から抜け出せ」『毎日新聞』 2020年8月14日
書評「村上春樹『猫を棄てる』」『週刊ポスト』 2020年10月
書評「植本一子他『コロナ禍日記』」『週刊ポスト』 2020年10月
対談「いま、なぜ「近代文学」なのか？：教育と読者＝作者の生成、あるいは言葉が作り出す「私」（紅野謙介と）」『早稲田文学』2020年冬号　早稲田文学会　2020年12月
インタビュー「1970と夢のゆくえ 「ジョー」とよど号」『茨城新聞』他　共同通信社　2020年12月6日
インタビュー「大塚英志が語る、日本の大衆文化の通史を描く意義「はみ出し者こそが権力に吸収されやすい」」『リアルサウンド』株式会社blueprint 2020年12月
書評「ミン・ジン・リー『パチンコ上・下』」『週刊ポスト』 2021年1月
インタビュー「「エヴァンゲリオン」25年目の完結　現代の分断社会を予見」『日本経済新聞』（夕刊） 2021年1月18日
書評「デヴィッド・グレーバー『ブルシット・ジョブ』」『週刊ポスト』 2021年2月

楠　綾子
●論文
「第1章　安全保障Ⅰ 「事態主義」の効用と限界」駒村圭吾、待鳥聡史編『統治のデザイン―日本の「憲法改正」を考えるために』弘文堂　2020年7月　6頁～26頁（依頼論文）
「サンフランシスコ講和条約・日米安保条約」筒井清忠編『昭和史講義【戦後

大塚　英志

●著書

『まんが訳酒呑童子絵巻』（監修、山本忠宏と共著）筑摩書房　2020年5月　222頁

『TOBIO Critiques #4』（編集、秦剛、宣政佑と共著）太田出版　2020年7月　112頁

『日本大衆文化史』（日文研大衆文化研究プロジェクト編著）KADOKAWA　2020年9月　358頁

『文学国語入門』星海社　2020年10月　334頁

『牧野守　在野の映画学』（近藤和都、森田のり子と共編）太田出版　2021年1月　352頁

『日本大衆文化論アンソロジー』（日文研大衆文化研究プロジェクト編［編集委員：伊藤慎吾、内田力、佐野明子、大塚英志］）太田出版　2021年2月　320頁

『「暮し」のファシズム――戦争は「新しい生活様式」の顔をしてやってきた』筑摩書房　2021年3月　352頁

『恋する民俗学者1 柳田國男編』（中島千晴と共著）KADOKAWA　2021年3月　832頁

『恋する民俗学者2 田山花袋編』（中島千晴と共著）KADOKAWA　2021年3月　624頁

●論文

「『マンガのかきかた』の「棒人間」はどこから来たか」岡泰正編『美術フォーラム21』美術フォーラム21　2020年5月　94頁～100頁（依頼論文）

「「ていねいな暮らし」の戦時下起源と「女文字」の男たち」『webちくま』筑摩書房　2020年5月　1頁～4頁（依頼論文）

「「外地」の翼賛一家　戦時下華北地方・日本統治下朝鮮の事例を中心に」大塚英志編『TOBIO Critiques #4』太田出版　2020年7月　61頁～81頁（依頼論文）

「戦時下の「共助」論――防毒マスクと「女生徒」」『webちくま』筑摩書房　2020年9月　1頁～5頁（依頼論文）

解題：柳田國男「伴を慕う心」、「小林秀雄「漫画」、吉本隆明「位相論」、入我亭我入「戯財録」、津野海太郎「勉強報告『世界定め』考」、柳田國男「口承文芸史考」、夏目漱石「素人と黒人」、加太こうじ「紙芝居昭和史」、手塚治虫「interview手塚治虫　珈琲と紅茶で深夜まで…」、江藤淳「村上龍・芥川賞受賞のナンセンス――サブ・カルチャーの反映には文学的感銘はない」「日本と私」『日本大衆文化論アンソロジー』（著書欄参照）　15頁～17頁、他（依頼論文）

「1900年の画期」前川志織編『明治後期文芸雑誌表紙・一條成美挿画コレク

行を考える」」（鷺珠江、土井善晴、石津祥介と）『文藝春秋』2021年3月号　2021年3月

「靴と日本」『公研』3月号　公益産業研究調査会　2021年3月

インタビュー「リーダーに聞く」『NIHU Magazine』Vol. 062　人間文化研究機構　2021年3月

「世界のひろがる著述群」『山田慶兒著作集の刊行に寄せて』臨川書店　2021年3月

インタビュー「井上章一・国際日本文化研究センター所長に聞く」『日本経済新聞』（夕刊）　2021年3月29日

牛村　圭

●論文

「東京裁判を知るための10冊：東京裁判の核心をつかむために」『昭和史がわかるブックガイド』文藝春秋　2020年5月　206頁～217頁（依頼論文）

「明治日本が見たストックホルムオリンピック：嘉納治五郎の大会報告を読みなおす」瀧井一博編著『「明治」という遺産―近代日本をめぐる比較文明史』ミネルヴァ書房　2020年10月　339頁～355頁（依頼論文）

「国際日本研究とJapanese studiesを架橋する――序に代えて」「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン編］『環太平洋から「日本研究」を考える』国際日本文化研究センター　2021年3月　1頁～7頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「「環太平洋学術交流会議」を終えて」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2020年7月

インタビュー「人コミュ通信 vol. 12　戦後75年、東京裁判をどう考えるか―牛村教授インタビュー」『国際日本文化研究センターウェブサイト』国際日本文化研究センター　2021年8月

榎本　渉

●著書

『僧侶と海商たちの東シナ海（増訂版）』講談社　2020年10月　321頁

●論文

「龍山徳見の入元と黄龍派の再興」『禅文化』256号　2020年4月　31頁～40頁（依頼論文）

「日宋・日元貿易船の乗員規模」『国立歴史民俗博物館研究報告』第223集　2021年3月　9頁～30頁（依頼論文・査読付き）

●その他の執筆活動

「成果なき者たちを思う」『本』　45巻11月号　2020年11月

年5月14日
「おおきに！関西　虎フィーバー とらわれぬ日々」『朝日新聞』（夕刊） 2020年5月28日
「悼む　井波律子さん」『毎日新聞』 2020年6月22日
「こころの玉手箱」（連載5回）『日本経済新聞』（夕刊） 2020年6月22日～2020年6月26日
書評「『遊郭』に見る数寄屋とアール・デコ」渡辺豪『遊郭』新潮社とんぼの本」『波』2020年7月号　新潮社　2020年7月
インタビュー「日本人とは何者か～これまでの常識を覆す」『サライ』2020年8月号　2020年7月
「ひもとく　井波律子さんを悼む」『朝日新聞』 2020年7月1日
インタビュー「関西のミカタ 「面白い大阪」近年の加工」『日本経済新聞』（夕刊） 2020年8月12日
「狩野元信とミケランジェロ」『公研』9月号　公益産業研究調査会　2020年9月
「飲み屋の写真家―甲斐芙佐義の可能性―」『KYOTOGRAPHIE 2020 catalogue』KYOTOGRAPHIE　2020年9月
“Kai Fusayoshi, nomiya photographer,” *KYOTOGRAPHIE 2020 catalogue*, KYOTOGRAPHIE, September, 2020.
「トイレはそんなに「悪い」のか」『サンデー毎日』2020年9月20日号　2020年9月
“The irony of phasing out plastic bags and disposing of masks.” *The Japan News*, September 12, 2020.
「靴と日本―土足のゆくえ」『修親』10月号　修親刊行事務局　2020年10月
「京都の端から、こんにちは」（連載6回）『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2020年10月～2021年3月
「東西まちまち・番外編」『読売新聞オンライン エンタメ・文化』 2020年10月4日
「今、美術の時間に何ができるのか。」『教育美術』11月号　公益財団法人教育美術振興会　2020年11月
講演資料等「京都の、いわゆるイケズを考える」『兵庫県高齢者放送大学』12月号　公益財団法人兵庫県生きがい創造協会　2020年12月
「第24回司馬遼太郎賞選評」司馬遼太郎記念館会誌『遼』2021年冬号（第78号） 公益財団法人司馬遼太郎記念財団　2021年1月
「ひとりで、京都。」『あまから手帖』2021年3月号　2021年2月
「店先のマスコット」日本サインデザイン協会編『Signs』17号　日本屋外広告業団体連合会　2021年3月
対談「大和ハウス生活文化フォーラム誌上特別企画「住まいと暮らしの不易流

「追悼　芳賀徹：「絵好き」な国際的比較文化論者の足跡を追う――学会発足の頃から最近まで」『ジャポニスム研究』第40号　2021年3月

井上　章一

●著書

『京都まみれ』朝日新聞出版　2020年4月　248頁

『討厌的京都（京都ぎらい）』（龚婷译訳）海口南海出版公司　2021年3月　165頁（中国語）

『世界の中の日本研究　批判的提言を求めて（創立30周年記念国際シンポジウム）』国際シンポジウム53（編著）国際日本文化研究センター　2021年3月　261頁

●論文

「도우미 Companion가 여간수로 불렸던 무렵（コンパニオンが女看守とよばれたころ）」佐野真由子、陸栄洙編『만국박람회와　인간의　역사（万国博覧会と人間の歴史）』소명출판（ソミョン出版）　2020年7月　249頁～274頁（韓国語）

「建築家と万国博覧会　EXPO'70の黒川紀章から考える」佐野真由子編『万博学　万国博覧会という、世界を把握する方法』思文閣出版　2020年8月　335頁～347頁（依頼論文）

「史料と建築様式の矛盾を克服する―法隆寺の再建をめぐって―」佐藤文子、吉田一彦編『日本宗教史6　日本宗教史研究の軌跡』吉川弘文館　2020年10月　144頁～166頁（依頼論文）

「建築と都市から見える明治維新―街並にブルジョワ革命の跡を読む―」瀧井一博編著『「明治」という遺産―近代日本をめぐる比較文明史』ミネルヴァ書房　2020年10月　73頁～88頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

書評「この人に訊け！」（連載7回）『週刊ポスト』　2020年4月～2021年2月

「わが人生最高の10冊」『週刊現代』4月4日号　2020年4月

「東西まちまち」（連載7回）『読売新聞』　2020年4月5日～2020年9月6日

「海の向こうで日本は。」（連載22回）『産経新聞』（夕刊）　2020年4月6日～2021年3月15日

インタビュー「ええやん！かんさい　万博と私」『読売新聞』（夕刊）　2020年4月9日

対談「「京都アカデミック ブリッジ」始まる」（瀧井一博、呉座勇一と）『京都新聞』　2020年4月10日

対談「国際日本文化研究センター 新旧所長対談」（小松和彦と）『京都民報』　2020年4月12日

インタビュー「一聞百見」（連載3回）『産経新聞』　2020年5月12日～2020

256号 『あいだ』の会　2020年11月

“Les Yeux clos d’Odilon Redon à Tōru Takemitsu: d’un œil à l’autre, ou le rêve en transmigration et l’apparition de l’esprit.” Sarah Burkhalter & Laurence Schmidlin, éd. *The Postcard Dialogues*, art&fiction, November 2020.（フランス語）

「ブルデュー『マネ、ひとつの象徴革命』余滴」藤原良雄編『機』 藤原書店 2020年12月

項目執筆「ニューアートヒストリーと、その後」美学会編『美学の事典』丸善出版　2020年12月

項目執筆「オリエンタリズムと美術――西洋は東洋をどう見たのか」美学会編『美学の事典』丸善出版　2020年12月

「追悼　金子務　自然科学と隣接領域の最先端を、知の未踏査圏に繋ぐ名人」『図書新聞』3481号　武久出版　2021年1月

「「絵巻物がマンガの起源」という「謬見」は、いかにして発生したのか？――映画アニメの隆盛が遡及的に再発見？した絵巻物の説話的文法：ひとつの挿話」『図書新聞』3479号　武久出版　2021年1月

書評「「現代に蘇る浦上玉堂の琴興・詩作・席画――十八世紀後半から十九世紀初年にいたる日本列島の知的雰囲気を眼前に彷彿とさせる」高橋博巳著『浦上玉堂――白雲も我が閑適を羨まんか』ミネルヴァ書房」『図書新聞』3482号　武久出版　2021年2月

書評「愚行の撲滅を目指すことに勝る愚行はない　零落の供笑か供笑の零落か（上）――四方田犬彦著『愚行の賦』（講談社）へのマルジナリア」『図書新聞』3486号　武久出版　2021年3月

エッセイ「退職にあたり　辞職の辞―「辞職」する者が、職場に伝言を遺して行く、というのは、妙ですね」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年3月

書評「愚行の撲滅を目指すことに勝る愚行はない　零落の供笑か供笑の零落か（下）――四方田犬彦著『愚行の賦』（講談社）へのマルジナリア」『図書新聞』3487号　武久出版　2021年3月

会議報告等「海洋と環太平洋・島嶼を視野におさめた次世代の研究計画に向けて――総括討論の司会をつとめて」「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン編］『環太平洋から「日本研究」を考える』国際日本文化研究センター　2021年3月

書評「鈴木貞美『歴史と生命　西田幾多郎の苦闘』作品社　二〇二〇年三月十五日刊」『日本哲学史研究』第17号　2021年3月

会議報告等「総研大文化フォーラムの評価と展望」『総研大文化フォーラム2020報告集：文化のレジリエンスとは？：〈異〉をつなぎ、未来へ』 2021年3月

振興財団　ポーラ美術館　2020年11月　6頁～10頁（依頼論文・査読付き）
“A.K. Coomaraswamy and Japan: A tentative overview.” Madhu Bhalla ed., *Culture as Power: Buddhist Heritage and the Indo-Japanese Dialogue*, Routledge India, December 2020, pp. 119–132.（依頼論文・査読付き）
「特集＊鳥獣戯画の世界　ウサギの跳躍 《鳥獣戯画》からの脱線の企て」『ユリイカ』第53巻第4号　青土社　2021年3月　272頁～281頁（依頼論文）
「世界のなかの国際日本研究を再考する：国際日本文化研究センター創立30周年記念シンポジウム「世界のなかの日本研究　批判的提言を求めて」の反省から」井上章一編『世界の中の日本研究　批判的提言を求めて（創立30周年記念国際シンポジウム）』国際シンポジウム53　国際日本文化研究センター　2021年3月　247頁～257頁
“You Say Liberté, Égalité, Fraternité? Japanese Critical Perceptions of the Idea of Europe: A Preliminary Reflection for the Regeneration of Universal Humanism,” Vladimir Biti, Joep Leerssen, and Vivian Liska eds., *The Idea of Europe: the clash of projections*, Volume: 37, Brill, March 2021, pp. 121–135.（依頼論文・査読付き）
●その他の執筆活動
「不世出の文化外交の達人・芳賀徹　その軌跡を追慕する――海外での交友関係の一端を導きに　追悼　芳賀徹」『図書新聞』3442号　武久出版　2020年4月
書評「「焔の坩堝による造形の変容――器に接して脱皮を遂げる彫刻の姿」廣田治子著『中空の彫刻――ポール・ゴーギャンの立体作品に関する研究』三元社」『図書新聞』3447号　武久出版　2020年5月
「スポーツとはなにか――「呪われたオリンピック」延期を前に立ち止まって考える」『図書新聞』3446号　武久出版　2020年5月
「「永遠の今」において遭遇する「我と汝」――西田幾多郎と九鬼周造の「偶発」的読み直しにむけて」『図書新聞』3453号　武久出版　2020年6月
「個の喪失と文学的磁場の生成――テクスト遺産の顕現と変容を欧米の眼差しから吟味する」『図書新聞』3461号　武久出版　2020年8月
“Obituary: Tôru Haga (1931–2020)” “Nécrologie : Tôru Haga (1931–2020)” *AILC-ICLA NEWSLETTER* No. 4, International Comparative Literature Association, September 2020.（複数言語）
エッセイ「「パンデミック」は何の予兆なのか？―身近な「悔い改め」への舵取りのために」『日文研』65号　国際日本文化研究センター　2020年9月
「「あいだ」の哲学に向けて：人文知の再定義と復権のために　藝術行為再考に向けた、暫定的な覚え書き（上）」『あいだ』第255号　『あいだ』の会　2020年9月
「「あいだ」の哲学に向けてくもの巣の「穴」をねらう：人文知の再定義と復権のために　藝術行為再考に向けた、暫定的な覚え書き（中）」『あいだ』第

切り崩す、即物的な批評の生成する現場：〔書評〕渡部直己『日本小説批評の起源』」『週刊読書人』3354号　2020年8月

「武漢発・新型コロナウイルス（COVID-19）が分断する世界――米中・中台関係に走る亀裂と軋轢、そして香港問題の行方【2020年：中国文学・文化年末回顧】」『図書新聞』3476号　武久出版　2020年12月

エッセイ「徐興慶先生の学問と実践――「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン編］『環太平洋から「日本研究」を考える』国際日本文化研究センター　2021年3月

書評「呂玉新『政治体制・文明・民族（エスニシティ）の辨別――德川日本思想史』／呂玉新『政體・文明・族群之辯――德川日本思想史』」『日本研究』第62集　国際日本文化研究センター　2021年3月

稲賀　繁美

●論文

“Weg (Dō)–Rahmenlosigkeit–Verlauf: Eine Reflexion auf ‚Japanisches’ in der Kunst.” Yasuhiro Sakamoto, Felix Jäger, and Jun Tanaka(Hrsg.) eds., *Bilder Als Denkformen: Bildwissenschaftliche Dialoge Zwischen Japan Und Deutschland. Berlin*, De Gruyter, June 2020. pp. 127–144.（依頼論文・査読付き）（ドイツ語）

“Cultural Gap, Mental Crevice, and Creative Imagination: Vision, Analogy, and Memory in Cross-Cultural Chiasms.” Tanehisa Otabe, Manfred Milz, Masanori Tsukamoto, Carole Maigné, James Kirwan, Gunter Gebauer, and Sean J. McGrath eds., *Journal of Aesthetics and Phenomenology* (online), Volume. 6, 2019, Taylor & Francis, June 2020, pp. 167–184.（依頼論文・査読付き）

「タイムカプセルとしてのミュージアム―魂の群れ映し遷す器として」川口幸也編『ミュージアムの憂鬱』水声社　2020年6月　389頁～403頁（依頼論文・査読付き）

「寄せては返す波のように―クールベの画業を政治遊戯と風景への対峙との振幅に捉える」鈴木一生、小坂井玲、森川もなみ、古賀暁子編　展覧会図録『クールベと海―フランス近代　自然へのまなざし―』ふくやま美術館、山梨県立美術館、パナソニック汐留美術館　2020年9月　6頁～11頁（依頼論文）

“Distance Reading, Migration of the Meaning and Metempsychosis through Translation: Is “World Literature or Global Art” Possible? -Comparative Literature and Art in the Context of the Globalization-” 荒木浩編『古典の未来学― Projecting Classicism』文学通信　2020年10月　836頁～849頁（依頼論文・査読付き）（複数言語）

「欧州航路からインターネットへ――日仏美術相互交流の150年」『CONNECTIONS 海を越える憧れ、日本とフランスの150年』公益財団法人ポーラ美術

「信玄公に学ぶ」『山梨日日新聞』 2021年1月1日
「追悼　半藤一利さん」『読売新聞』 2021年1月14日
「悠仁さまに伝えた「空襲体験」（さようなら、半藤一利さん）」『文藝春秋』99(3)　2021年2月
「歴史家・磯田道史　半歩遅れの読書術」（連載4回）『日本経済新聞』 2021年2月6日～2021年2月27日
書評「久保田哲著『明治十四年の政変』」『毎日新聞』 2021年2月13日
インタビュー「今は震災「後」でなく「間」」（聞き手・多可政史）『読売新聞』2021年3月4日
インタビュー「人生のとき　好きな本求め、再受験　歴史学者・磯田道史さん」『毎日新聞』（夕刊） 2021年3月10日
「災害生きのびる知恵　歴史に学ぼう」『毎日小学生新聞』 2021年3月21日

磯前　順一

●著書
『これからの天皇制 令和からその先へ』（原武史、菅孝行、島薗進、大澤真幸、片山杜秀と共著）春秋社　2020年11月　272頁

●論文
「石母田正　転向と革命 ―三木清・羽仁五郎・平泉澄―」『歴史評論』847　歴史科学協議会　2020年10月　17頁～29頁（査読付き）
「神がかり・通俗道徳・資本主義の精神――安丸良夫の民衆思想史から見た日本の近世・近代」『アリーナ（ARENA）』23　中部大学　2020年11月　424頁～430頁（査読付き）
「世俗主義批判としての翻訳不能論――タラル・アサド『世俗の翻訳』（2018）を読む――」（ゴウランガ・チャラン・プラダンと共著）『アリーナ（ARENA）』23　中部大学　2020年11月　771頁～784頁（査読付き）

●その他の執筆活動
「2019年度日文研海外シンポジウム「ポストコロニアル研究の遺産――翻訳不能なものを翻訳する」」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2020年7月

伊東　貴之

●論文
「「礼教」的滲透、泛化及其展开――以中国為中心的近世東亜的事例」常建華主編『『中国社会歴史評論』（Chinese Social History Review）』25　天津古籍出版社　2020年11月　215頁～225頁（中国語）

●その他の執筆活動
書評「書かれてある「物（モノ）」への愛着×拘泥×使嗾―〈和声〉の系譜を

成毛眞、楠木建、内田樹、高橋源一郎と共著）祥伝社　2021年2月　264頁

●論文

「「糞」の生態史でみた江戸時代（特集 生き物と現代文明）」国立民族学博物館友の会編『季刊民族学』175号2021年冬　公益財団法人千里文化財団　2021年1月　40頁～43頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「感染症の日本史」（連載6回）『文藝春秋』98(5)～(10)　2020年4月～9月

「磯田道史の古今をちこち」（連載12回）『読売新聞』 2020年4月8日～2021年3月17日

書評「馬部隆弘著『椿井文書　日本最大級の偽文書』」『毎日新聞』 2020年4月25日

「オンライン座談会　コロナ禍を生きるには　知恵と共助、希望の道」（平野啓一郎、富永京子と／構成・棚部秀行、須藤唯哉、毎日新聞社）『毎日新聞』 2020年5月5日

インタビュー「「終わらないパンデミックはない」磯田道史さんと疫病史」（聞き手・宮地ゆう、朝日新聞社）『朝日新聞DIGITAL』 2020年5月7日

「日本社会のコロナ・ディスクロージャー」『Bunshun Woman』vol. 6　2020夏号　文藝春秋　2020年6月

書評「池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史　美の起源に迫る』」『毎日新聞』 2020年6月27日

「Opinion Leader's VOICE 磯田道史さん」『Oggi』2020年9月号　小学館　2020年7月

「疾病の日本史③攘夷思想を燃え上がらせた幕末のコレラ」『日本経済新聞』 2020年7月1日

「日本人は「はやり病」とどう向き合ってきたか」『日本経済新聞』 2020年7月4日

「感染症の歴史に学ぶ教訓」『TKC』2020年8月号　TKC全国会　2020年8月

「あらゆる分野で持続可能な体制づくりを」『京都新聞』日曜版　2020年8月2日

書評「堀新、井上泰至編『信長徹底解読』」『毎日新聞』 2020年8月29日

書評「高橋博巳編『浦上玉堂　白雲も我が閑適を羨まんか』」『毎日新聞』 2020年10月17日

インタビュー「著者に聞いてみた！（感染症の日本史）」『アサヒ芸能』通巻3766号　2020年11月

書評「瀧井一博編著『「明治」という遺産―近代日本をめぐる比較文明史』」『毎日新聞』 2020年12月5日

書評「2020年「この3冊」／下」『毎日新聞』 2020年12月19日

「高島礼子の歴史と美を訪ねて（第5回・第6回）スペイン風邪に学ぶ教訓」（高島礼子と共著）『潮』744・745　潮出版社　2021年1月～2月

『文化・情報の結節点としての図像―絵と言葉でひろがる近世・近代の文化圏』（山田奨治と共編著）晃洋書房　2021年3月　146頁

●論文

「『訓蒙図彙』諸本再考」『文化・情報の結節点としての図像―絵と言葉でひろがる近世・近代の文化圏』（著書欄参照）　13頁～25頁（査読付き）

●その他の執筆活動

会議報告等「図像と言葉で調べる：「近世期絵入百科事典データベース」の構築」『大正イマジュリィ』No. 15　大正イマジュリィ学会　2020年5月

「春画研究の闘士ありき 林美一と「国貞裁判」」『芸術新潮』新潮社　2020年9月

「文化をつなげる場としての展覧会　ロンドン大学SOAS・大英博物館の国際共同研究プロジェクトを事例として」荒木浩編『古典の未来学― Projecting Classicism』文学通信　2020年10月

石川　肇

●著書

『競馬にみる日本文化』法藏館　2020年10月　160頁

●その他の執筆活動

「岩上力が語る、新国劇の殺陣と緒形拳」東海大学文明研究所、横浜市歴史博物館編『戦後大衆文化史の軌跡―緒形拳とその時代―』公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団　2020年10月

インタビュー「奥深い、文化としての競馬」『長崎新聞』他2紙掲載　2020年10月23日他

インタビュー「競馬にみる日本文化」『朝日新聞』他4紙掲載　2020年11月21日他

インタビュー「日本文化を競馬で語る」『京都新聞』他2紙掲載　2020年12月18日他

エッセイ「時代劇は京都文化であり日本文化―フィールド調査型の時代劇研究が構築するテクスチャー」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年2月

インタビュー「文化として競馬伝える」『愛知新聞』　2021年2月13日

インタビュー「森鴎外の未発表書簡24通発見」『京都新聞』　2021年3月18日

磯田　道史

●著書

『感染症の日本史』文藝春秋　2020年9月　255頁

『マンガでわかる災害の日本史』（河田惠昭・防災監修、備前やすのり・マンガ）池田書店　2021年2月　256頁

『この1冊、ここまで読むか！ 超深掘り読書のススメ』（鹿島茂、出口治明、

所員活動一覧（2020年4月1日～2021年3月31日）

荒木　浩

●著書

『説話文学研究の最前線　説話文学会55周年記念・北京特別大会の記録』（説話文学会編）文学通信　2020年9月　366頁

『古典の未来学―Projecting Classicism』（編）文学通信　2020年10月　871頁（複数言語）

『環太平洋から「日本研究」を考える』（「国際日本研究」コンソーシアム編［白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダンと共編］）国際日本文化研究センター　2021年3月　192頁（複数言語）

●論文

「身を投げる／子を投げる―孝と捨身の投企性をめぐって」『古典の未来学―Projecting Classicism』（著書欄参照）　181頁～214頁

「希求される〈作者〉性――物語という散文の成立をめぐって」ハルオ・シラネ、鈴木登美、小峯和明、十重田裕一著『〈作者〉とは何か―継承・占有・共同性』岩波書店　2021年3月　79頁～99頁（依頼論文・査読付き）

●その他の執筆活動

「文遊回廊　29回　今昔物語集　巻二十二　高藤ノ内大臣ノ語　第七」『京都新聞』　2020年4月23日

書評「時空をあおぐ、伝承の海」『『日本説話索引』パンフレット』清文堂出版　2020年5月

「文遊回廊　30回　大和物語　第百六十五段」『京都新聞』　2020年5月28日

「もう一歩先の古典読解―古代・中世文学の向こう側―」京都府立高等学 国語科研究会編『研究会誌』No. 30（令和元年度版（デジタル））京都府立高等学 国語科研究会　2020年7月

「はがき通信」日本歴史学会編『日本歴史』吉川弘文館　2020年9月

解説「時空を翔る、ベトナム俳句の未来像」グエン・ヴー・クイン・ニュー編『句集『俳句と四季』』Nhà xuất bản: NXB Văn Hóa - Văn Nghệ　2020年10月（複数言語）

「映画『羅生門』生んだ玉手箱」『京都新聞』　2021年2月12日

エッセイ「仏陀の夢と非夢―西行伝への示唆をもとめて」小峯和明編『東アジアに共有される文学世界　東アジアの文学圏』東アジア文化講座3　文学通信　2021年3月

石上　阿希

●著書

『江戸のことば絵事典―『訓蒙図彙』の世界』KADOKAWA　2021年3月　349頁

第350回　令和2年　10月　8日（木）
第351回　令和2年　10月22日（木）
第352回　令和2年　11月　5日（木）
第353回　令和2年　11月26日（木）
第354回　令和2年　12月10日（木）
第355回　令和2年　12月24日（木）（開催中止）
第356回　令和3年　　1月　7日（木）
第357回　令和3年　　1月21日（木）
第358回　令和3年　　2月　4日（木）
第359回　令和3年　　2月18日（木）
第360回　令和3年　　3月　4日（木）
第361回　令和3年　　3月18日（木）

外国人来訪者

令和2年10月22日　トマン・ベルナール（日仏会館・フランス国立日本研究所（UMIFRE19フランス外務省・国立科学研究センター）所長）

海外渡航

（※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により0件）

会議

運営会議

第57回　令和2年　6月26日（金）（書面審議）
第58回　令和2年　12月18日（金）
第59回　令和3年　3月　5日（金）

調整会議

第341回　令和2年　4月　8日（水）
第342回　令和2年　4月22日（水）（開催中止）
第343回　令和2年　5月13日（水）
第344回　令和2年　6月　3日（水）
第345回　令和2年　6月16日（火）
第346回　令和2年　7月　1日（水）
第347回　令和2年　7月15日（水）
第348回　令和2年　9月　2日（水）
第349回　令和2年　9月16日（水）
第350回　令和2年　10月　7日（水）
第351回　令和2年　10月21日（水）
第352回　令和2年　11月　4日（水）
第353回　令和2年　11月25日（水）
第354回　令和2年　12月　9日（水）
第355回　令和2年　12月23日（水）（開催中止）
第356回　令和3年　1月　6日（水）
第357回　令和3年　1月20日（水）
第358回　令和3年　2月　3日（水）
第359回　令和3年　2月17日（水）
第360回　令和3年　3月　3日（水）
第361回　令和3年　3月17日（水）

センター会議

第341回　令和2年　4月　9日（木）（書面審議）
第342回　令和2年　4月23日（木）（開催中止）
第343回　令和2年　5月14日（木）
第344回　令和2年　6月　4日（木）
第345回　令和2年　6月18日（木）
第346回　令和2年　7月　2日（木）
第347回　令和2年　7月16日（木）
第348回　令和2年　9月　3日（木）
第349回　令和2年　9月17日（木）

井上所長による所内案内動画「内外の橋渡しをこころざす日文研」
所蔵資料のウェブ展示「日文研医学コレクションにみる東西医療文化史」

国際研究集会

第54回［令和2年11月13日（金）～15日（日）］
テーマ　帝国のはざまを生きる―交錯する国境、人の移動、アイデンティティ
研究代表者　蘭 信三 客員教授（上智大学 教授）／松田 利彦 教授

公開講演会

［令和2年10月13日（火）］
第1回　日文研―京都アカデミック ブリッジ
テーマ　愛と芸術の都を語ろう
パネリスト　井上 章一 所長／ウスビ・サコ（京都精華大学 学長）／赤松 玉女（京都市立芸術大学 理事長・学長）
進　行　呉座 勇一 助教
［令和3年3月28日（日）］
第2回　日文研―京都アカデミック ブリッジ
テーマ　京と江戸　美の文化学
開会挨拶　井上 章一 所長
メッセージ　青木 淳（京都市京セラ美術館 館長）
パネリスト　タイモン・スクリーチ（ロンドン大学 教授／東京外国語大学 客員教授）／松平 莉奈（画家）／石上 阿希 特任助教
進　行　荒木 浩 教授

特別講演会

［令和2年10月30日（金）］
小松和彦先生退任記念講演会（オンライン同時開催）
講演者　小松 和彦 前所長
テーマ　私の学問人生と日文研
司　会　松田 利彦 副所長

テーマ　留学を夢見た近世の僧侶

Nichibunken Evening Seminar

第242回［令和2年7月2日（木）］（オンライン開催）
発表者　サイモン・パートナー（デューク大学 教授／日文研 外国人研究員）
テーマ　Class and Gender in an Age of Revolution: The life of a samurai housewife before and after the Meiji Restoration
第243回［令和2年9月3日（木）］（オンライン同時開催）
発表者　アストギク・ホワニシャン（ロシア・アルメニア大学 上級講師／日文研 外来研究員）
テーマ　Victims of Forced Sterilizations in Japan and the Politics of Redress
第244回［令和2年11月5日（木）］（オンライン同時開催）
発表者　西川 賢（津田塾大学 教授）（オンライン登壇）
テーマ　What's Happened in the 2020 Presidential Election?
第245回［令和3年3月4日（木）］（オンライン同時開催）
発表者　袁 漸達（日文研 外来研究員）
テーマ　Intertwined National Ideals: Manchukuo's Chinese Government Leaders, 1931–1937

学術講演会

第68回［令和3年2月16日（火）］（オンライン開催）
講演者　細川 周平 名誉教授
テーマ　チンドンの因縁
司　会　マルクス・リュッターマン 教授

日文研一般公開

［令和2年11月21日（土）］（オンライン開催）
テーマ　経験と記録：世界はいかに疫病と対峙してきたか
【YouTube プレミア公開イベント】
講　演「日本史のなかの疫病」
導入役　牛村 圭 教授
講　師　磯田 道史 准教授
【YouTube プレミア公開イベント】
シンポジウム「疾病と治療を人文科学の立場から考える」
講　師　安井 眞奈美 教授／松田 利彦 副所長／劉 建輝 教授／光平 有希 特任助教
司　会　劉 建輝 教授
【特設ページコンテンツ】

日文研フォーラム

第336回［令和2年4月14日（火）］（開催中止）

発表者　アストギク・ホワニシャン（ロシア・アルメニア大学 上級講師／日文研 外国人研究員）

テーマ　障害者の戦後―性と生殖の権利を中心に

コメンテーター　坪井 秀人 教授

第337回［令和2年6月9日（火）］（開催中止）

発表者　李 杰玲（海南師範大学国際教育学院 副教授／日文研 外国人研究員）

テーマ　疫病から石化話へ―日中生死観とその文学表現の比較

コメンテーター　荒木 浩 教授

第338回［令和2年12月8日（火）］

発表者　李 杰玲（海南師範大学国際教育学院 副教授／日文研 外来研究員）

テーマ　疫病から石化話へ―日中生死観とその文学表現の比較

コメンテーター　荒木 浩 教授

第339回［令和3年2月9日（火）］（開催中止）

発表者　廖 欽彬（中山大学哲学系 准教授／日文研 外来研究員）

テーマ　京都学派と戦前の台湾哲学

コメンテーター　伊東 貴之 教授

木曜セミナー

第263回［令和2年9月17日（木）］（オンライン同時開催）

発表者　山本 忠宏（神戸芸術工科大学 助教）

テーマ　絵巻まんが訳から考える間メディア的方法論

第264回［令和2年10月22日（木）］（オンライン同時開催）

発表者　藤本 憲正 機関研究員

テーマ　宗教間対話と日本のキリスト教――「他者」による信仰の変容――

コメンテーター　磯前 順一 教授

第265回［令和2年11月26日（木）］（オンライン同時開催）

発表者　川橋 範子 客員教授（オンライン登壇）

テーマ　ポストコロニアル・フェミニスト宗教研究者への道行

コメンテーター　安井 眞奈美 教授

第266回［令和3年1月21日（木）］（オンライン開催）

発表者　吉村 智博（大阪市立大学都市研究プラザ 特別研究員）

テーマ　差別と博物館―「負の歴史」をめぐる研究と表象

コメンテーター　磯田 道史 准教授

第267回［令和3年2月18日（木）］（オンライン開催）

発表者　榎本 渉 准教授

◉令和２年５月１日　採用
プロジェクト研究員　稲垣 智恵
プロジェクト研究員　堀井 佳代子
◉令和２年６月30日　退職
外国人研究員　ジェームス・ケテラー（シカゴ大学教授）
◉令和２年７月31日　退職
外国人研究員　サイモン・パートナー（デューク大学教授）
外国人研究員　廖 欽彬（広州中山大学准教授）
外国人研究員　アストギク・ホワニシャン（ロシア・アルメニア大学上級講師）
◉令和２年８月27日　退職
外国人研究員　阮 南（ベトナムフルブライト大学教授）
◉令和２年８月31日　退職
外国人研究員　李 杰玲（泰山大学泰山研究院研究員）
◉令和２年９月30日　退職
助教　古川 綾子
◉令和２年10月１日　再任
助教　白石 恵理
◉令和２年12月３日　採用
外国人研究員　王 志松（北京師範大学教授）
外国人研究員　張 龍妹（北京外国語大学教授）
◉令和３年１月１日　採用
外国人研究員　堀内 アニック（パリ第７大学教授）
◉令和３年１月12日　採用
外国人研究員　財吉拉胡（内蒙古民族大学教授）
◉令和３年３月31日　退職
教授　稲賀 繁美
教授　ジョン・ブリーン
助教　石川 肇
プロジェクト研究員　木場 貴俊
プロジェクト研究員　堀井 佳代子
技術補佐員　井岡 詩子
◉令和３年３月31日　委嘱期間満了
客員准教授　鍾 以江（東京大学東洋文化研究所准教授）
客員准教授　奈良 勝司（広島大学大学院准教授）
客員准教授　飯窪 秀樹（学校法人駿河台学園駿台法律経済アンドビジネス専門学校非常勤）
客員准教授　大橋 直義（和歌山大学准教授）

彙　　報

（令和２年４月１日～令和３年３月31日）

人事異動

◉令和２年４月１日　任命

所長　井上 章一

◉令和２年４月１日　採用

機関研究員　齊藤 紅葉

機関研究員　小川 仁

機関研究員　髙田 友紀

プロジェクト研究員　根川 幸男

技術補佐員　稲垣 智恵

◉令和２年４月１日　昇任

教授　フレデリック・クレインス

◉令和２年４月１日　契約更新

特任助教　前川 志織

◉令和２年４月１日　併任

副所長　瀧井 一博

副所長　松田 利彦

研究調整主幹　山田 奨治

研究調整主幹　牛村 圭

研究調整主幹　安井 眞奈美

情報管理施設長　関野 樹

海外研究交流室長　楠 綾子

総合情報発信室長　牛村 圭

インスティテューショナル・リサーチ室長　松田 利彦

◉令和２年４月１日　委嘱

客員教授　太下 義之（同志社大学教授）

客員教授　川橋 範子

客員教授　苅田 真司（國學院大學教授）

客員准教授　佐野 明子（同志社大学准教授）

客員准教授　吉村 美香（愛知淑徳大学非常勤講師）

◉令和２年４月24日　退職

外国人研究員　マッシミリアーノ・トマシ（西ワシントン大学教授）

◉令和２年４月29日　退職

外国人研究員　李 市埈（崇実大学校教授）

◉令和２年４月30日　退職

技術補佐員　坂 知尋

フランス語読解補助・論文作成指南（中級）（継続）

代表者　稲賀 繁美

概　要　中級以上の実務能力開発、論文作成の手ほどきをする。教材については、受講生との相談のうえで決定する。

文学・文化史理論入門（継続）

代表者　坪井 秀人

概　要　文学および文化史に関する基礎的な理論を学びながらテクストの読解・分析の実践的方法を修得する。

近現代史史料文献研究（継続）

代表者　瀧井 一博

概　要　日本近現代史の基礎史料と古典的および先端的な文献を講読し、社会科学的な歴史研究の方法と実践を討究する。

中国古典学の基礎（継続）

代表者　伊東 貴之

概　要　経書を中心とするオーソドックスな中国古典語の文献を中国音と訓読とを併用して読解する技法を涵養する。併せて中国古典学や儒教入門のための道案内とする。

宗教学基礎論（継続）

代表者　磯前 順一

概　要　聖俗論、世俗主義論、宗教概念論、禁忌論など、宗教学の基本的な主題を、近代政治史の文脈にのせて議論を行なう。丹念なテクスト講読が中心。

心身技法の実践的・理論的探究（継続）

代表者　稲賀 繁美

概　要　合気道ほかの心身技法を実際に体験しつつ、心身の鍛錬、呼吸法の体得、精神情緒管理の実践に努める一方、そうした心身技法の理論的考察・記述の可能性を模索する。

美川 圭「貴族はいかにして生き残ったか―俊成・定家と冷泉家―」
石田 俊「萩藩毛利家における公武婚」
〈第4回研究会〉
2021年3月6日（オンライン開催）
寺内 浩「10世紀国家軍制の再検討」
木下 聡「室町幕府と公家間の人的関係について」
田中 誠「鎌倉末～南北朝期の幕府評定衆・奉行人と戦乱」
堀井 佳代子「貴族の狩猟再考」

（文責：研究協力課）

◆基礎領域研究

英文日本歴史研究書講読（継続）
代表者　牛村 圭
概　要　達意の英語で書かれた日本史研究書を素材に、英文を正しく読み、自然な日本語にする手法の修得を目指す。

中世文学講読（継続）
代表者　荒木 浩
概　要　日本中世文学の文献を、影印を参照し、英訳などとも対比しながら精読するとともに、最新の研究動向などについての発表や情報交換の場としても活用する。

韓国語の運用（基礎・応用）（継続）
代表者　松田 利彦
概　要　業務や研究で韓国語を必要とする職員・大学院生等を対象に韓国語の会話・作文・読解の習得を目指した授業を行う。基本的に昨年度からの受講生を対象としているが、ある程度学習歴のある方の新規受講も歓迎する（要相談）。

古記録学基礎研究（継続）
代表者　倉本 一宏
概　要　日本前近代の根幹的史料である古記録の解読を、原本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。当面、源経頼の『左経記』を読む。

フランス語基礎運用（初級）（継続）
代表者　稲賀 繁美
概　要　初心者を対象として、初歩の運用能力を実践的に身に付ける。教科書としては市販の教材の準備を参加者各自にお願いする。他の教材は現場で提供する。

高山 敬太「日本型教育の海外展開事業（EDU-Port ニッポン）とは何か」
苅谷 剛彦「『追いついた近代　消えた近代』（岩波書店、2019 年）書評会」
〈第 3 回研究会〉
2021 年 3 月 13 日（オンライン開催）
平松 隆円「女子教育と美」
井上 章一「魅惑のミッションスクール」

貴族とは何か、武士とは何か
（研究代表者　倉本 一宏）
〔共同研究者名〕
榎本 渉、呉座 勇一、伊東 貴之、磯田 道史、龔 婷、久葉 智代、堀井 佳代子、青山 幹哉、石田 俊、上野 勝之、大石 学、岡野 友彦、川合 康、木下 聡、京楽 真帆子、東海林 亜矢子、関 幸彦、髙橋 昌明、田中 誠、佃 美香、告井 幸男、寺内 浩、野口 孝子、野口 実、東島 誠、樋口 健太郎、カレル・フィアラ、服藤 早苗、松田 敬之、松永 和浩、美川 圭、森 公章、刑部 芳則、川西 孝男、重田 香澄

〔海外共同研究員名〕
宋 浣範、梁 暁弈、劉 暁峰
〈第 1 回研究会〉
2020 年 7 月 4 日（オンライン同時開催）
野口 実「中世成立期における東国武士の『勢力』について―「鎌倉政権」再考」
呉座 勇一「武士論の成果と課題」
〈第 2 回研究会〉
2020 年 10 月 10 日（オンライン同時開催）
髙橋 昌明「〝余〟は如何にして新武士論の提唱者になりし乎」
カレル・フィアラ「日本とチェコにおける貴族と武士・騎士の成立と発展」
上野 勝之「触穢とケガレ」
佃 美香「平安時代から鎌倉時代にかけての即位式の変化」
〈第 3 回研究会〉
2021 年 1 月 9 日（オンライン同時開催）
樋口 健太郎「平安・鎌倉時代の摂関家と武家勢力」
服藤 早苗「平安時代の婚姻形態　天皇・貴族・武士～研究史を中心に」

2020年11月14日（オンライン同時開催）
飯田 祐子「再生産領域の文化的配置」
美馬 達哉「新型コロナウイルス感染症の傷跡」
アストギク・ホワニシャン「知的障害者施設または旧優生保護法の被害者について」
2020年11月15日（オンライン同時開催）
市川 遥「傷痍軍人と文学」
葉 暁瑶「『虹いくたび』における戦争の傷痕」
光石 亜由美「敗戦のトラウマと性的不能、あるいはエロティックな戦争」
金 貴粉（ゲストスピーカー）「在日朝鮮人とハンセン病―戦後を中心に―」
〈第4回研究会〉
2021年2月21日（オンライン開催）
辛島 理人「神戸からの戦後日本」
宇野田 尚哉「べ平連こうべの軌跡」
黒川 伊織「ある在阪沖縄人「党生活者」の経験」

日本型教育の文明史的位相 (15)

（研究代表者　瀧井 一博）
〔共同研究者名〕
根川 幸男、齊藤 紅葉、稲垣 恭子、竹内 里欧、西田 彰一、齊藤 智、ラプリー・ジェルミー、安藤 幸、井上 義和、椎名 健人、高山 敬太、片山 杜秀、宇野 重規、柏木 敦、大澤 聡、大田 美佐子、阿川 尚之、足羽 與志子、礒山 麻衣、待鳥 聡史、瀬平劉 アントン、大中 有信、平松 隆円
〔海外共同研究員名〕
苅谷 剛彦
〈第1回研究会〉
2020年9月19日（オンライン同時開催）
稲垣 恭子「共同研究会「「日本型」教育文化を問い直す―新たな人間形成論をめざして」を振り返って」
瀧井 一博「日本型教育の文明史とは」
2020年9月20日
今後の研究計画について打ち合わせ
〈第2回研究会〉
2020年11月28日（オンライン開催）

〈第6回研究会〉
2020年9月26日（オンライン同時開催）
山下 典子「縮小社会におけるアグリツーリズムの可能性」
沢田 眉香子「庶民による、美と価値の下克上はあるか」
〈第7回研究会〉
2020年12月19日（オンライン開催）
砂連尾 理（ゲストスピーカー）「とつとつダンスの実践からこれからの社会の文化創造を考える」
三脇 康生「アートの社会的処方は可能か？―中動態の議論を超えて―」
2021年3月13日（オンライン開催）
山森 亮（ゲストスピーカー）「草の根の経済思想：1970年代イギリス労働者階級　女性解放運動のオーラルヒストリーから」
山本 泰三「現代の資本主義における労働」

戦後日本の傷跡
（研究代表者　坪井 秀人、宇野田 尚哉）
〔共同研究者名〕

アストギク・ホワニシャン、田村 美由紀、増田 斎、葉 暁瑶、橋川 智也、石川 巧、辛島 理人、川口 隆行、黒川 伊織、小杉 亮子、飯田 祐子、高 榮蘭、佐藤 泉、美馬 達哉、鳥羽 耕史、宋 恵媛、光石 亜由美、ニコラス・ランブレクト、キツニック・ラウリ、解 放、中村 平、髙畑 早希、奥村 華子、市川 遥
〔海外共同研究員名〕
キアラ・コマストリ
〈第1回研究会〉
2020年4月10日（オンライン開催）
坪井 秀人、宇野田 尚哉「プロジェクトの趣旨説明」
〈第2回研究会〉
2020年7月4日（オンライン同時開催）
宇野田 尚哉「「戦後」・「冷戦」と「対抗」文化」
2020年7月5日（オンライン同時開催）
キツニック・ラウリ「脚本家水木洋子と戦後社会派映画再考」
鳥羽 耕史「母の死とオリンピック――水川淳三監督『おかあさんのばか』（1964）をめぐって」
山本 直樹（ゲストスピーカー）「アレゴリーとしての傷痕」
〈第3回研究会〉

〈第14回研究会〉
2020年12月26日（オンライン同時開催）
井上 章一「カフェー時代の花柳界」
木村 立哉「映画とカフェー」
2020年12月27日（オンライン同時開催）
斎藤 光「カフェーとは何だったのか」

「かのように」という原理で形成してきた文通―「文書」概念や、その様式、記号、表象、意図性
（研究代表者　マルクス・リュッターマン）
〔共同研究者名〕
荒木 浩、榎本 渉、磯前 順一、廣田 浩治、梶谷 真司、金 泰虎、小島 道裕、森 洋久、小口 雅史、岡崎 敦、高橋 一樹、ウィッターン・キリスティアン
〔海外共同研究員名〕
ミハエル・キンスキー、イエルグ・クウェンサー
〈第6回研究会〉
2020年10月24日（オンライン開催）
小島 道裕「日本の文書史から考える比較古文書研究の課題」
〈第7回研究会〉
2021年2月20日（オンライン開催）
岡崎 敦「西欧文書学とアーカイブズ学―諸原則と現代的展開―」

縮小社会の文化創造：個・ネットワーク・資本・制度の観点から
（研究代表者　山田 奨治）
〔共同研究者名〕
松田 利彦、田村 美由紀、太下 義之、佐野 真由子、谷川 建司、大石 真澄、小川 さやか、荻野 幸太郎、沢田 眉香子、服部 圭郎、服部 正、三脇 康生、山本 泰三、吉澤 弥生、吉村 和真、山下 典子、木村 智哉、伊藤 遊
〔海外共同研究員名〕
玉野井 麻利子
〈第5回研究会〉
2020年7月18日（オンライン同時開催）
服部 圭郎「縮小時代における都市のつくり方」
広井 良典（ゲストスピーカー）「人口減少社会のデザイン――ポスト成長時代の創造性」

2020年10月10日（オンライン同時開催）
奈良場 勝「大雑書の易をめぐる書林の動き」
宮島 一彦「七夕の伝説と信仰」
平野 多恵「おみくじの現在―神の託宣歌から歌占、和歌みくじへ」
〈第3回研究会〉
2021年3月6日（オンライン開催）
徳永 誓子「中世における巫女の呪具」
上野 勝之「日本古代・中世における託宣の性格―護法占以前」
山下 克明「陰陽道の祭祀と祭文―百怪祭をめぐって」
中町 泰子「横浜中華街における占い店舗群の形成とその担い手に関する考察」
大形 徹「巫術と占術―巫と筮をめぐって」
水口 幹記「蘇民将来札再考」

〈基幹共同研究〉
近代東アジアの風俗史
（研究代表者　劉 建輝、斎藤 光）
〔共同研究者名〕

井上 章一、石川 肇、安井 眞奈美、唐 権、申 昌浩、永井 良和、西村 大志、濱田 陽、李 珣淑、嘉本 伊都子、加藤 政洋、崔 吉城、矢原 章、川井 ゆう、岩井 茂樹、井上 雅人、長田 俊樹、木村 立哉、仲 万美子、橋爪 節也、北浦 寛之、土居 浩、劉 玲芳
〔研究発表〕
〈第12回研究会〉
2020年7月11日（オンライン同時開催）
安井 眞奈美「洗濯の民俗」
斎藤 光「カフェーを特殊させる流れについて」
2020年7月12日（オンライン同時開催）
木村 立哉「成人映画」
井上 章一「裸体美術の東アジア」
〈第13回研究会〉
2020年10月3日（オンライン同時開催）
濱田 陽「名・暦・歳の多様性」
長田 俊樹「沙羅双樹再考」
2020年10月4日（オンライン同時開催）
土居 浩「葬墓制の近代化（？）」
李 珣淑「「オンドル」と日韓の近代」

根川 幸男「帝国と新大陸の〈あいだ〉：南米行き移民船をめぐる感染症との闘い」
〈第3回研究会〉
2020年10月11日（オンライン同時開催）
根川 幸男「帝国と新大陸の〈あいだ〉：南米行き移民船をめぐる感染症との闘い」
滝澤 修身「あいだの哲学―キリシタン時代を通して―」
ミツヨ・デルクール＝イトナガ「紡ぐ。永遠・共生・科学―アーティスト4人の作品と提言」
2020年10月12日（オンライン同時開催）
多田 伊織「謫仙　藤井聡太　異能の扱われ方」
〈第4回研究会〉
2021年1月29日（オンライン開催）
春藤 献一「愛護される動物と駆除される動物―蜘蛛から考える」
君島 彩子「パンデミックと仏像―なぜ地蔵にマスクをつけるのか？―」
2021年1月30日（オンライン開催）
鈴木 洋仁（ゲストスピーカー）「加藤秀俊「あいだ」の人」
〈第5回研究会〉
2021年2月20日（オンライン開催）
森岡 優紀「身体と認知：自閉症スペクトラム者の自伝から」
稲賀 繁美「蜘蛛の巣上の無明研究会　今年度まとめと来年度予定」

巫俗と占術の現在―東アジア世界の民間信仰の伝播と展開
（研究代表者　吉村 美香、榎本 渉）
〔共同研究者名〕
倉本 一宏、木場 貴俊、久葉 智代、龔 婷、廬 雪健、宋 丹丹、島村 恭則、細井 浩志、徳永 誓子、水口 幹記、佐々木 聡、髙橋 あやの、深澤 瞳、山下 克明、奈良場 勝、上野 勝之、林 淳、平野 多恵、中町 泰子、大形 徹、塩月 亮子、宮島 一彦、東畑 開人
〔海外共同研究員名〕
大野 裕司、魯 成煥、鄭 宰相
〔研究発表〕
〈第1回研究会〉
2020年7月5日（オンライン同時開催）
小南 一郎（ゲストスピーカー）「殷墟の卜辞は占いといえるのかの検討」
〈第2回研究会〉

2020年10月11日（オンライン同時開催）
松田 利彦「研究会の狙い」
〈第2回研究会〉
2021年3月13日（オンライン開催）
加藤 茂生「書評『植民地帝国日本における知と権力』」
中生 勝美「日本植民地における異民族統治と人類学：西洋植民地との比較から」
加藤 道也「満洲国と駒井徳三―統治認識を中心に」

蜘蛛の巣上の無明：電子情報網生態系下の身心知の将来
（研究代表者　稲賀 繁美）
〔共同研究者名〕
フレデリック・クレインス、石川 肇、松木 裕美、光平 有希、根川 幸男、飯窪 秀樹、鋳物 美佳、春藤 献一、陳 イジェ、二村 淳子、君島 彩子、前川 志織、ゴウランガ・チャラン・プラダン、齊藤 紅葉、藤本 憲正、寺本 敬子、志賀 祐紀、白石 恵理、森岡 優紀、今泉 宜子、岩井 茂樹、鵜戸 聡、江口 久美、大西 宏志、小倉 紀蔵、尾鍋 智子、加藤 善朗、申 昌浩、莊 千慧、滝澤 修身、竹村 民郎、多田 伊織、土居 浩、戸矢 理衣奈、平倉 圭、堀 まどか、松井 裕美、松村 薫子、村中 由美子、藤貫 裕
〔海外共同研究員名〕
デンニッツァ・ガブラコヴァ、近藤 貴子、ミツヨ・デルクール＝イトナガ、片岡 真伊
〔研究発表〕
〈第1回研究会〉
2020年7月10日（オンライン開催）
江口 久美「都市／建築と蜘蛛の巣と身体」
二村 淳子「阮文素の藝術論―フランスへの返答」
鋳物 美佳「柳生新陰流剣術稽古における工夫：行為的直観を手がかりとして」
2020年7月11日（オンライン開催）
飯窪 秀樹「北米、ブラジル、満州、および戦後移植民事業の連続性～構築と実施における信濃系の果たした役割～」
〈第2回研究会〉
2020年9月5日（オンライン開催）
松井 裕美「蜘蛛の巣を編む　ダイアグラムとアナロジー」
平倉 圭「異種と踊る――宮沢賢治「蠕蟲舞手」のタイポグラフィー」

志野 好伸「西田幾多郎の「物」をめぐる思想―源了圓論文を承けて」

帝国のはざまを生きる―帝国日本と東アジアにおける移民・旅行と文化表象

（研究代表者　蘭 信三、松田 利彦）

〔共同研究者名〕

劉 建輝、単 荷君、高 燕文、中山 大将、権 香淑、野入 直美、八尾 祥平、李 洪章、石川 亮太、原 佑介、木下 昭、長沢 一恵、深尾 葉子、坂部 晶子、高 媛、塚瀬 進、丁 智恵、福本 拓、松平 けあき、孫 嘉睿、上田 貴子、ニコラス・ランブレクト

〔海外共同研究員名〕

張 嵐、朴 裕河、陳 姃湲、李 正熙

〔研究発表〕

〈第4回研究会〉

2020年8月27日（オンライン同時開催）

朴 裕河「日本人妻とジェンダーポリティックス――戦後日本における越境の問題を考える」

ニコラス・ランブレクト「李恢成と戦後引揚げ」

李 洪章「在日朝鮮人留学生政治犯にとっての「母国」と「統一」―金元重の語りに着目して」

高 媛「戦前における満洲ツーリズムと中国人社会」

長沢 一恵「戦前期における日本～朝鮮半島を結ぶ航路形成―京都府・舞鶴港を中心に」

李 正熙「朝鮮華僑の中華商会研究―大邱中華商会を中心に」

野入 直美「「湾生映画」に見る植民地二世の記憶と表象」

植民地帝国日本とグローバルな知の連環

（研究代表者　松田 利彦）

〔共同研究者名〕

劉 建輝、光平 有希、単 荷君、高 燕文、香西 豊子、駒込 武、高野 麻子、福士 由紀、石原 あえか、石川 亮太、愼 蒼健、中生 勝美、李 昇燁、加藤 道也、やまだ あつし、通堂 あゆみ、米谷 匡史、加藤 茂生、長沢 一恵、都留 俊太郎

〔海外共同研究員名〕

顔 杏如、朴 潤載、陳 姃湲、鄭 駿永

〔研究発表〕

〈第1回研究会〉

2020年9月27日（オンライン開催）

浜渦 辰二「日本哲学史展開期におけるフッサール現象学の受容」

鈴木 将久（ゲストスピーカー）「革命文学論争における彭康」

王 嘉新（ゲストスピーカー）「近代中国哲学におけるベルグソンの受容――彭康を中心に」

朱 剛（ゲストスピーカー）「家の現象学――ハイデガー、レヴィナスから儒家へ」

張 偉（ゲストスピーカー）「静寂意識と万物一体」

〈第5回研究会〉

2020年10月31日（オンライン開催）

陳 徳中（ゲストスピーカー）「中国における哲学研究――近代後期以来の状況」

邱 建碩（ゲストスピーカー）「墨子の「尚同」思想と多元的社会」

洪 子偉（ゲストスピーカー）「Taiwanese Philosophy: From the Sit-Chûn Movement to Austronesian Indigenous Epistemology」

鬼頭 葉子（ゲストスピーカー）「田辺元『キリスト教の辯證』における終末論の意義」

〈第6回研究会〉

2021年2月6日（オンライン開催）

直江 清隆（ゲストスピーカー）「三枝博音と媒介の思想」

飯嶋 裕治（ゲストスピーカー）「和辻哲郎の倫理学の出発点――大正期のニーチェ解釈との関連性から」

横山 陸（ゲストスピーカー）「悔恨の哲学――田辺とシェーラーの比較から」

王 青「『善の研究』と中国思想」

林 永強「Rereading Nishida Kitarō as a New Confucian: With a Focus on His Early Moral Philosophy」

2021年2月7日（オンライン開催）

フォンガロ・エンリコ（ゲストスピーカー）「永遠と体験―西田幾多郎の時間論に関する考察」

合田 正人「海と島々からの日本思想史――和辻哲郎『風土』『鎖国』から」

呉 偉明「近世における「漢神」の日本化について」

方 向紅（ゲストスピーカー）「モナドロジーの論理中断と朱熹の理気論による現象学の再構築――気の現象学の必要性と可能性」

秋富 克哉「「詩人としてこの大地の上に住む」――西谷啓治『寒山詩』に即して」

合田 正人、藤田 正勝、井川 義次、嶺 秀樹、安部 浩、景山 洋平、竹花 洋佑、太田 裕信、亀井 大輔、林 永強、秋富 克哉、出口 康夫、植村 玄輝、ダリシエ・ミシェル、張 政遠、河合 一樹、山村 奨

〔海外共同研究員名〕

王 青、呉 偉明、佐藤 将之、樋口 達郎

〔研究発表〕

〈第2回研究会〉

2020年5月24日（オンライン開催）

牧野 英二（ゲストスピーカー）「ディルタイ哲学と京都学派」

嶺 秀樹「西田と九鬼における永遠の今の思想――場所論と実存論の観点から」

安部 浩「和辻・マルクス・アリストテレス――和辻倫理学の生成」

佐藤 将之「近代日本における中国哲学の誕生――明治10年代に東京大学で行われた諸講義を中心に」

植村 和秀「哲学・批判・反知性主義」

竹花 洋祐「歴史主義としての田辺哲学」

太田 裕信「西田幾多郎と柳宗悦」

〈第3回研究会〉

（所外開催　京都大学北部総合教育研究棟益川ホール）

2020年8月28日（オンライン同時開催）

杉村 靖彦「懺悔道のポエティクスに向けて――田辺元『ヴァレリーの芸術哲学』再読」

亀井 大輔「デリダと九鬼周造――偶然性をめぐって」

張 政遠「御進講と日本哲学」

植村 玄輝「現象学者としての尾高朝雄」

景山 洋平「日本のハイデガー受容における弁証法」

2020年8月29日（オンライン同時開催）

宮沢 千尋（ゲストスピーカー）「植民地期ベトナムの言語・文化ナショナリズム――ファム・クインと『南風雑誌』を中心に」

小倉 紀蔵「霊性論から哲学へ――近代日本と朝鮮の場合」

石井 剛「感情、共感、政治――中国近代哲学からのアプローチ」

山村 奨「日本の倫理学における和辻哲郎」

稲賀 繁美「感情移入と気韻生動の周辺」

佐藤 麻貴（ゲストスピーカー）「音をめぐる、めぐる音――立ち現われ一元論的、音の世界」

河合 一樹「近代日本美学と「あはれ」――大西克礼を中心として」

〈第4回研究会〉

香西 豊子「書評会『種痘という〈衛生〉近世日本における予防接種の歴史』（2019年、東京大学出版会）「21世紀の疫因論」『現代思想 緊急特集：感染／パンデミック』5月号（2020年）」

今井 秀和「胎児と幼児の神秘イメージ―鬼子、予言児、件の系譜」

〈第10回研究会〉

2020年9月12日（オンライン同時開催）

田里 千代「スポーツをする場の形と身体―暴力性との関わりから」

金 容儀「松本清張小説における殺人犯罪と身体」

姜 姍「生と死の境界―江戸時代鍼灸胴（銅）人形における身体観念について」

2020年9月13日（オンライン同時開催）

鈴木 則子「江戸時代のコレラをめぐる生活史」

前川 志織「戦間期日本のチョコレート広告にみる「少女」の身体表象」

〈第11回研究会〉

2020年11月28日（オンライン同時開催）

安井 眞奈美「共同研究会の成果報告としての身体に関する展示」

光平 有希「西洋医学史古典文献・宗田文庫図版資料の概要その2」

伊藤 謙「バーチャル・ミュージアムの可能性」

二宮 美鈴「出品検討中の適塾関係資料の紹介」

中本 剛二「医療の中の死者と身体」

〈第12回研究会〉

2021年1月9日（オンライン開催）

安井 眞奈美「共同研究会の成果報告としての身体に関する展示・打ち合わせ」

木下 知威「近代日本における視・聴覚障害の身体イメージについて」

多田 伊織「島国を襲う疫病―アテナイと日本」

2021年1月10日（オンライン開催）

板坂 則子「死体から生まれた赤子―戯作に見る母と子の身体」

阿部 奈緒美「間引き図絵による民衆教諭と〈産むべき〉身体観」

東アジアにおける哲学の生成と展開―間文化の視点から

（研究代表者　廖 欽彬）

〔共同研究者名〕

伊東 貴之、稲賀 繁美、劉 建輝、谷 徹、石井 剛、杉村 靖彦、小倉 紀蔵、上原 麻有子、志野 好伸、中島 隆博、浜渦 辰二、植村 和秀、

〔海外共同研究員名〕
徐 載坤、杉田 智美
〈第3回研究会〉
2020年9月27日（オンライン開催）
堀 まどか「ヨガは、スポーツか？―アメリカ初期ヨーガ導師に出逢った木村秀雄・駒子夫妻を中心に」
佐々木 浩雄「日本代表の誕生とスポーツの国家的有用性：オリンピック選手派遣費をめぐる動向を中心に（1912–1938）」
牛村 圭「書評セクション　高嶋 航『国家とスポーツ―岡部平太と満州の夢』（角川書店、2020年）」
〈第4回研究会〉
2020年11月28日（オンライン開催）
窪田 暁（ゲストスピーカー）「スポーツ人類学概論：その学説史と最新動向」
〈第5回研究会〉
2021年3月28日（オンライン開催）
町田 樹（ゲストスピーカー）「アーティスティックスポーツの文明開化：フィギュアスケートにおけるスポーツとアートの相互交渉史」
酒瀬川 亮介（ゲストスピーカー）「ドーピングの半世紀をたどる」

〈国際共同研究〉
身体イメージの想像と展開―医療・美術・民間信仰の狭間で
（研究代表者　安井 眞奈美、ローレンス・マルソー）
〔共同研究者名〕
木場 貴俊、石上 阿希、井上 章一、古川 綾子、前川 志織、山田 奨治、坂 知尋、光平 有希、アストギク・ホワニシャン、姜 姍、川橋 範子、香西 豊子、板坂 則子、中本 剛二、相田 満、蘆田 宏、今井 秀和、遠藤 誠之、越智 秀一、木森 圭一郎、倉田 誠、桑原 牧子、鈴木 則子、鈴木 由利子、高橋 淑子、田里 千代、波平 恵美子、松岡 悦子、宮崎 康子、エドワード・ドロット、伊藤 謙、阿部 奈緒美、木下 知威、二宮 美鈴、稲田 健一、多田 伊織
〔海外共同研究員名〕
金 容儀、魯 成煥、杉田 智美
〔研究発表〕
〈第9回研究会〉
2020年7月18日（オンライン同時開催）

花、サイモン・パートナー、森岡 優紀、松田 宏一郎、土屋 礼子、五百旗頭 薫、菅原 真弓、百瀬 響、大久保 健晴、アレキサンダー・ベネット、岡本 貴久子、土谷 桃子、奈良岡 聰智、細川 周平

〔研究発表〕

〈第5回研究会〉

2020年12月19日（オンライン開催）

今後の研究計画と成果の公表についての意見交換

松田 宏一郎、土屋 礼子、菅原 真弓、百瀬 響、アレキサンダー・ベネット、岡本 貴久子、土谷 桃子、奈良岡 聰智、森岡 優紀、アリステア・スウェール、瀧井 一博、西山 由理花

近代東アジア文化史の再構築Ⅰ―19世紀の百年間を中心に

（研究代表者　劉 建輝）

〔共同研究者名〕

稲賀 繁美、石川 肇、劉 序楓、光平 有希、磯田 道史、井上 章一、森岡 優紀、稲垣 智恵、上垣外 憲一、陳 力衛、王 宝平、小倉 紀蔵、白幡 洋三郎、単 援朝、陳 継東、仲 万美子、松宮 貴之、森田 憲司、深尾 葉子、伊藤 謙、南 誠、李 偉、高橋 博巳、村田 雄二郎、岸 陽子、安藤 潤一郎、陳 捷、劉 岸偉、戦 暁梅、平岡 隆二、李 長波、閻 小妹

〔海外共同研究員名〕

孫 建軍、王 中忱、唐 権、孫 江、新井 菜穂子

〔研究発表〕

〈第2回研究会〉

2021年2月26日（オンライン開催）

劉 建輝「広州、上海、長崎――近代東アジアモダンロードの成立」

唐 権「来舶清人について：概念、資料と統計」

王 紫沁「松阪市蔵伊孚九筆『離合山水図』の制作と享受」

文明としてのスポーツ／文化としてのスポーツ

（研究代表者　牛村 圭）

〔共同研究者名〕

フレデリック・クレインス、稲賀 繁美、劉 建輝、ジョン・ブリーン、光平 有希、西山 由理花、倉田 健太、田村 美由紀、増田 斎、井上 章一、古田島 洋介、藤田 大誠、川島 浩平、佐伯 順子、佐々木 浩雄、高嶋 航、竹村 民郎、等松 春夫、永井 久美子、堀 まどか、吉江 弘和

高橋 悠介、橋本 正俊、猪瀬 千尋、今枝 杏子、大河内 智之、川口 成人、川本 慎自、小助川 元太、小山 順子、坂本 亮太、重田 みち、谷口 雄太、貫井 裕恵、山田 徹、芳澤 元、大澤 絢子、伊藤 慎吾

〔海外共同研究員名〕

亀田 俊和

〔研究発表〕

〈第8回研究会〉

2020年6月20日（オンライン開催）

石井 悠加（ゲストスピーカー）「蓮如と和歌　絵巻補作と歌歴から」

谷口 雄太「足利直冬の上洛・没落と石塔・桃井・山名・斯波―『三国伝記』が描いたもの・描かなかったもの―」

〈第9回研究会〉

2020年9月19日（オンライン開催）

川口 成人「紀伊畠山氏と室町文化　―伴雲軒紹高と畠山右馬頭家をめぐって―」

川本 慎自「夢窓派の応永期」

三輪 眞嗣（ゲストスピーカー）「応永・永享期における東大寺の惣寺と院家」

2020年9月20日（オンライン開催）

中本 真人（ゲストスピーカー）「北山惣社御神楽と綾小路信俊」

高橋 悠介「『三国伝記』の神祇関係説話小考」

柏原 康人（ゲストスピーカー）「『三国伝記』における「霊地」考」

牧野 和夫（ゲストスピーカー）「『三国伝記』：琵琶湖東の宗教的環境の一端　―倍山と常陸・出羽・濃尾―」

〈第10回研究会〉

2020年12月13日（オンライン開催）

貫井 裕恵「室町期における東寺と東寺執行家について」

大河内 智之「粉河寺式千手観音像図像の成立と展開　―縁起の図像化―」

伊藤 伸江（ゲストスピーカー）「正徹周辺の学芸と和歌活動　―応永二十年代から永享年間を中心に―」

大衆文化と文明開化：幕末から明治への激動期における大衆メディアの位置及び役割

（研究代表者　アリステア・スウェール）

〔共同研究者名〕

瀧井 一博、ジョン・ブリーン、古川 綾子、石上 阿希、西山 由理

内田 力「東京帝大セツルメントにおける大衆メディア活用とその後：災害後のメディアと社会運動」
前川 志織「戦間期日本における製菓会社PR誌のグラフィック・デザインと『企業内工房』」
室井 康成「史伝小説という戦略―海音寺潮五郎における「西郷隆盛」の人物造形をめぐって―」
花田 史彦「映画観客としての戦後思想家―丸山真男を中心に」
板倉 史明「1980年代における特撮映画コンテストと特撮ファン共同体――伊丹グリーン劇場における『グリーンリボン賞』受賞作品から読み解く」
萩原 由加里「鴨川をどりにおけるプロパガンダ―花街の中での戦争」
藤岡 洋「199x–200x アングラ空間の穴からみえた世界」
マリア・デル・カルメン・バエナ・ルピアネス（連携研究員）「スペインのコミックにおける日本の文化の研究とそのフランス語、英語、日本語への翻訳：自殺の森のケース」
近藤 和都「“へき地”からのアニメ視聴者運動：雑誌上のリストと投稿欄を通じたファン実践に着目して」
(2) 川松 あかり「語り継ぐことと文化創造運動のあいだ―旧産炭地筑豊における「地べたの声を聴く会」の活動から」
金 日林「日韓基本条約以降の東映動画の韓国進出」
蔡 錦佳「戦中戦後の台湾における二重統制下の漫画・運動そして日本大衆文化の海外事例」
横田 尚美「参加を求める戦時下の婦人雑誌―衣生活を中心に―」
雑賀 忠宏「『悪書追放』から『作家としての姿勢』へ」
菊地 暁「さらにいくつもの〈こども風土記〉のために」
エドモン・エルネスト・ディ・アルバン「街空間と運動としての女性向けメディアミックス」
山本 忠宏「1910年代の写真小説における両義性とその実践」
アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス「閉じた世界の開かれたネットワーク―ボーカロイドムーブメントにおける参加と活動」

応永・永享期文化論―「北山文化」「東山文化」という大衆的歴史観のはざまで―
（研究代表者　大橋 直義、呉座 勇一）
〔共同研究者名〕

共 同 研 究

（2020年4月1日～2021年3月31日）

〈重点共同研究〉

「運動」としての大衆文化

（研究代表者　大塚 英志）

〔共同研究者名〕

アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス、前川 志織、佐野 明子、板倉 史明、内田 力、菊地 暁、神松 一三、近藤 和都、嵯峨 景子、杉本 仁、鈴木 麻記、鈴木 洋仁、團 康晃、鶴見 太郎、石田 美紀、萩原 由加里、ビョーン＝オーレ・カム、藤岡 洋、牧野 守、松井 広志、室井 康成、雑賀 忠宏、竹村 民郎、川松 あかり、藤嶋 陽子、花田 史彦、香川 雅信、横田 尚美、谷島 貫太、滝浪 佑紀、櫻木 千恵、北浦 寛之、川口 典成、山本 忠宏、伊藤 慎吾、オウ ケイカイ

〔海外共同研究員名〕

浅野 龍哉、蔡 錦佳、斉 梦菲、秦 剛、マーク・スタインバーグ、宣 政佑、エドモン・エルネスト・ディ・アルバン

〔研究発表〕

〈第10回研究会〉

2020年8月27日（オンライン開催）

鈴木 洋仁「ニコニコ動画は『運動』だったのか？ 協働という観点から見るポピュリズムとweb」

團康 晃「子どもの読書環境と読書内容の変容」

佐野 明子「戦後日本におけるアニメーションのファン文化の興隆と意義」

宣 政佑「韓国と日本の「下請けシステム」とその「作者」について」

ビョーン＝オーレ・カム「負けるプレイ・高揚させるプレイ―LARPでの共同創造的なストーリーテリング」

杉本 仁「後藤総一郎と常民大学運動」

神松 一三「①正力松太郎の新聞事業観―大阪毎日新聞の本山彦との比較において― ②正力松太郎による読売新聞の紙面改革とその源流 ③三原山火口探検のメディア史的検証」

孫 旻喬「「人造人間」はなぜ泣くか？――田川水泡『人造人間』からみるマンガとアバンギャルド芸術の接点――」

鶴見 太郎「柳田民俗学の組織化」

日文研　六十六号

二〇二一（令和三）年九月三〇日発行

編　集　榎本　渉、白石恵理

発　行　大学共同利用機関法人　人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所　〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話　（〇七五）三三五―二二二二

ファックス　（〇七五）三三五―二〇九一

ホームページ　https://www.nichibun.ac.jp

印刷　中西印刷株式会社

NICHIBUNKEN

ISSN 0915-0889